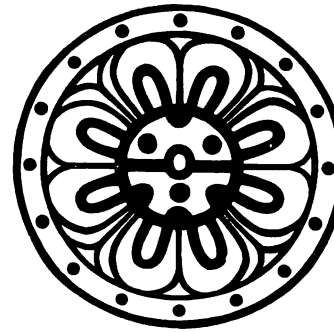
（川口勇冉）

会誌名「層富」（そほ・そふ）の由来

私たちが住んでいる平城ニュータウンの地域は、古代には「層富」または「曾布」「添」とも記され、「倭六県」（やまとのりくのあがた）の一つでありました。出典は『日本書紀』の神武即位前紀己未年の春２月壬辰朔辛亥（20日）の条にみえる「層富県」によりました。

題字もはじめ小さく、あと大きくしましたのは皆様の将来と本会の末広の発展を願ったものです。

古代大和の由緒ある地名を理事会の賛同を得て会誌名としました。ご愛顧の程を。　（網干善教）



会　章

平城ニュータウンの「平」と文化協会の「文」を上下に組み合わせ，単純な円形にまとめ，音如ヶ谷瓦窯跡から出土の古代軒丸瓦の中央部分に配置したものです。蓮華の中の埴輪の顔のようにも，二人三脚で楽しんでいるようにも見えます。

（基本デザイン　朱雀・筧　裕）

大和路見学会

層富

一九九五年

第十二号　目次

巻頭言……網干　善教　1
倭は国のまほろば……網干　善教　2
私の歩んできた道……片桐　一夫　5
俳句……8
漢詩……片桐　一夫　15
【偶感】
天災の中に拾った一粒の真珠　木村　長子　16
短歌……18
グループからの便り……27
新「同好会」紹介……79
第十二回文化祭　記録……81
一九九五年度総会　記録……87
会則……93
役員名簿……96
組織分担……97
会員名簿（巻末から　逆ページ）……111

【巻頭言】

目的を持ち、生きるということ

会長　網干善教

「人生の目的」とか「会の目的」あるいは「目的地」などという「目的」の意味は、「成し遂げようと目指す事柄」「行為の目指すところ」「意図している事柄」であり、もう少し難しく考えれば「意志によってその表現が欲求され、行為の目標として行為を規定し、方向づけるもの」（広辞苑）と理解されています。

平城ニュータウンも会則の第三条に「会員の研究・創作発表、知識の交換並びに会員相互間及び他の文化団体との連絡提携の場となり、総合文化に関する進歩普及をはかり、地域文化の発展に寄与することを目的とする。」とあります。

私たちは、このような大きな理想の旗標のもとにたとえ小さなことであっても、できることから、現していこうという考えのもとで行動してきました。そして最近は参加して下さる会員も増加してきたということは、この目的を理解し、賛同して下さる人が多くいて下さると感謝しています。

これからも会の運営に積極的に参画して下さる方に御礼を申し上げますと共に自己の研鑽と地域への貢献を考えつつ活動を続けてゆきたいと思っています。

何卒、御支援の程をお願いします。

第十三回総会記念講演（要旨）

『倭は国のまほろば』

関西大学教授　網干善教

いろいろな会や雑誌の名前に「まほろば」という言葉が目についたり、聞いたりすることがあります。この「まほろば」とか「まぼらま」というのは、有名なヤマトタケルノミコトの「大和は　国のまほろば　たたなづく　青垣山　ごもれる　倭し　うるはし」と詠まれた歌にみえることはよく知られています。「まほろば」の意味は「まほらま」に同じで「ま」は接頭語、「ほ」は秀れているという意味「ろ」は接尾語「ば」は間の転呼となり、「最もすぐれた地域」ということになります。

さて、ヤマトタケルノミコトの「まほろば」については『古事記』にも『日本書紀』にも掲載されています。ヤマトタケルは系譜の伝承からみると、景行天皇の皇子で仲哀天皇の父となっています。記・紀では日本古代における伝説的な英雄の一人であります。

歌の意味は「大和は　国のまほろば」です。それは「たたなづく　青垣山　こもれる」すなわち「重なり合って並んでいる青い山の垣に囲まれている」ということ。「だから大和は美しい国だ」ということになります。これは「思国歌（くにしぬびうた）」とあるように「はるか故郷を追憶して歌ったもの」とされています。

ところが、この歌を詠まれた場所が『古事記』と『日本書紀』では異なります。まず『古事記』をみますと、倭建命は天皇の命をうけて東国蝦夷を治めに行かれました。この物語のなかには「草薙剣（くさなぎのつるぎ）」や「弟橘姫（おとたちばなひめ）」あるいは「伊吹山神退治」など有名な話が記されています。そしてミコトは

伊勢の三重村（みへのむら）に来られたとき「我が足、三重に匂如（まがりな）して甚（いた）く疲れたり」といわれたので、その地を「三重」というのだと書いてあります。

そして、そこから「能煩野（のぼの）」というところに行かれました。ここは現在の三重県亀山市田村町というところに比定されています。この地で「国思はして歌ひたまはく」とありますように、大和をしのんで「大和は、国のまほろば……」と歌われました。また、そのとき、別の三首の歌も詠まれました。そのうちの一首には「平群（へぐり）の山の熊白樗（くまかし）の葉」とあります。また「はしけやし（なつかしい）吾家（わぎへ）の方（かた）よ雲居（くもゐ）たち来も」とあります。このように「五・七・七」を基調とした歌を「片歌（かたうた）という」とあります。この時に病気が大変重くなりまして、崩なられました。

そこで使いの者がいそいで大和に伝えられ、后や皇子たちがこの地に駆けつけられまして御陵を造られ、その付近の田甫を這い廻って悲しみ泣かれたとあります。そしてこの時、詠まれた四首が書かれてあり、この歌はいまでも天皇の大葬の時に唱われるのだとあります。

ところが、御陵に納められたヤマトタケルの遺骸は白鳥となって天に翔け、河内国の志幾（しき）に飛んでゆきましたので、そこにまた御陵をつくりました。これを白鳥陵といいます。しかしまたそこから翔んで行かれましたとあります。これがヤマトタケルの白鳥伝説です。

一方、『日本書紀』の方は違います。ヤマトタケルは、天皇の命をうけて九州の「熊襲（くまそ）」を討つために出発しました。「熊襲」の「熊」というのは「球磨」のことで今の熊本県の南部、「襲」というのは「そのくに」で今の鹿児島の東部あたりと考えられます。したがって南九州の古代の国のことだろうといわれています。この遠征は十年間位の長い時間がかかりました。

『日本書紀』「景行天皇十七年春三月」の条をみますとヤマトタケルは「子湯県（こゆのあがた）」（今の宮崎県西都市附近）に行幸され「丹裳小野（にものおの）」（これはどこかわかりません）というところで、東の方を眺めて、左右にいた人に「この国は、日の出る方に向かっている」といわれましたので、日向国（ひゆうがのくに）と名付けられたというのです。そして、そこの野中の大

石の上に登られて、都を憶ばれ三首の歌謡を詠まれました。その二首が有名な「倭は、国のまほろま……」という歌です。これは「思邦歌（くにしのびうた）」であると書いてあります。

そのあとこの話とは別に、後に東国蝦夷地の平定に行かれ、帰途伊勢の能褒野で崩れられたとあります。このところは『古事記』と同じですが、そのあとの白鳥伝説は少し違います。すなわち『日本書紀』では「白鳥と化したまひて陵より出て倭国を指して飛びたまふ」とあります。そこで棺の中を見たら、衣服だけがあって、屍骨がなかった。そこで使者が白鳥を追ったところ「倭の琴引原（ことひきはら）現在の奈良県御所市富田というところに停ったので、そこに陵を造りましたが、白鳥はさらに河内の「旧市邑」今の大阪府羽曳野市古市（軽里附近）に飛んで行きましたので、そこにも陵を造りました。時の人はその三つの陵を白鳥陵と呼んだとありますが、現在もこの三陵が宮内庁によって指定されています。

このように「倭は国のまほろば……」という歌は『古事記』は伊勢の能煩野で御崩りになるとき、『日本書紀』は熊襲遠征の時、日向国で詠まれたとありますが、両者ともに遥か故郷を偲んでの歌であるといえます。意味は故郷大和の美しさを表現したものです。「大和は、青垣のように山が周っていて、非常に美しい、秀れたところだ」ということになります。古来から「美しい国大和国」とされる奈良の風土と歴史を守り、楽しい生活の場とし、さらに後世に伝えていかねばなりません。平城ニュータウンの附近が、古きものと新しきものの調和した日本の核になるよう努力したいと思います。

私の歩んできた道

私の戦時中の外地駐留時の思い出

片桐一夫

戦時の話をすることでありますが、戦争中の其の頃に二十歳代であった私達は、夫々の出征部隊の基幹でありました。戦地では敵兵及び非戦闘員の現地外国人と接触することになり、彼等との対人関係は良かれ悪しかれ経験せねばなりませんでした。

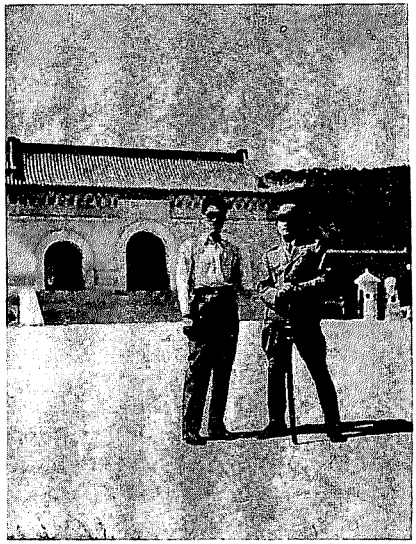
私は学校を出てから直ぐ、陸軍機関へ就職して外地の戦地勤務が長かったので、現地派遣軍の軍事作戦の展開に伴い関東州、中国、仏印、カンボジア、タイ、マライ、シンガポール、スマトラ、ジャワと転戦を重ね、殆ど首都などの都市に駐留したのでした。

私の外地駐留の思い出の最たるものは、やはり隣国の中国の北京、南京の人々のことでした。中国のあの優雅な北京、破壊された南京など中国史も好きだった私は、あの一望万里の大平原を疾駆して逐鹿争覇の興亡の歴史を繰りひろげた中国民族の面影を想い出し、広漠たるあの風土を一見した時には迫に、深い懐古の情に浸った次第です。また転戦の移動は是も思い出の多い輸送船による航海、軍用機による航空、軍用車による陸路移動でした。さて私は長い戦地勤務でありましたので当時経験した敵兵及び現地の非戦闘員の人々に対する思い出など色々あります。軍隊は武装集団であるだけに、其の個々の一部の軍人が少し非礼な態度で無力の非武装現地人に接していた事を見たり聞いたことはあります。

それとは別の事ですが今でも強く印象に残っているのは、シンガポールで英兵やオーストラリア兵が、駅のプラットホームで日本軍の使役として運搬労働させられていたのを見た時、戦に敗れたら是のようになるのかと痛感したことです。

それから昭和十七年から十八年にかけて、スマトラやジャワの都市に駐留した時の話です。当時日本軍の占領地では戦争のため現地人の失業者が多くなり、日本軍の使役業務にでもと職を求めて私達の部隊へも集まって来ました。スマトラ、ジャワはオランダ領でしたので日常オランダ語とインドネシア語でしたが日本軍相手には凡て英語で先ず、PLEASE HELP ME 、と申し立てて沢山の現地人が就職を頼みに来たものです。

戦争に依って物価は高騰し彼等の生活は苦しくなり、



―― 右が私 ――

その上企業主や経営者の逃亡、企業倒産などで多くの現地人は失業者となり其の生活は切りつめたものでした。

戦争になると一番迷惑を受けるのは現地の人達です。そのことは彼等の生活で思い知らされました。戦争には勝っても負けても畢竟は夫々空しい結果を招来することを銘記しなければならないと思いました。

また戦時中でも楽しいこと、現地の人々から優しくしてもらったことも沢山あります。たとえば、あのスマトラのメダンに駐留したときは現地の華僑の方々から色々の果物などを時々贈られて、北京語や英語で交歓したこともあり、平和な時が来るのを話し合ったこともあります。あの人達は今どうしていられるだろうと思い出すことがあります。

以上は当時感じたことや主に東南アジアで見聞した事でしたが外地駐留時の思い出としてお話をしました。

当時をふり返ってみますと戦争のため私は、青春時代に中国や東南アジアの国々の色々なことを見聞することが出来、また昭和十八年夏には内地部隊附となって無事に日本へ帰ることが出来て本当に幸運でした。

戦争末期まで作戦のため戦地に残留しなければならな

かった部隊の戦友は、其の後戦死したり病歿したり、生きていても捕虜生活を送ったりして、やっと日本へ帰ることが出来たのです。やはり戦争は本当に空しいものだと思います。戦後五十年。私たち日本人は長かった十五年戦争の為に、多くの有能な人材を空しく、草生す屍、水漬く屍となし奉ったことを深く哀惜しなければならないと思います。

それにつけても私は戦地で起居辛酸を共にした陣亡の戦友の面影や、当時語り合った色々の事どもを今に懐しく思い出します。

戦線の移動で南方に進むに従って、太陽の高度は遂次高くなり天空の星座は段々と北空に移り去って、南天の星座が次々と頭上高く仰がれる様になり、軍務倥偬の間にも南方夜空の星座を仰ぎみる毎に、我ら遠くも来つるものかなと祖国を遥かに離れた遠征の感懐を、共々に沁々と話し合ったものでした。

学校時代、星座に関心のあった私達に新しい天文の知識を与えて下さったのは、好きだった高等数学の先生でした。この先生は戦前、台湾に旅行されて南十字星を高雄まで見に行かれたのを、話して下さったことを思い出して、戦地より先生に、遥かなこの南方戦線では南天の夜空高く南十字星や大マゼラン雲、小マゼラン雲が仰ぎ見られますと、お便りした事もあり、是も外地駐留時の思い出です。幼小より北緯度の星座に親しんでいた私達は、初めて仰ぎ見る内地で見られなかった南緯度の星座の美しい輝きには本当に魅了されました。

南の夜空に一際と白く美しく輝くあの南十字星を望見したとき、私は往古より南洋を航海探検した先人達も、えも言われぬあの浄らかな崇高神秘な輝きを、敬虔な祈りで仰いだことだと思いました。あの十字星座を仰いでいると其の様な思いに浸った次第です。それから彼の有名な南洋周航探検家のフェルヂナンド・マゼランの名で知られている、大・小マゼラン雲は南天の夜空に夫々、長径が月の視直径の約七倍、三倍半の大きさに茫洋と眺められる楕円星雲でしたが、このマゼラン雲や南十字星を共に見上げた戦友の戦死を哀悼する毎に、是ら南天の星辰も私の戦時中の外地駐留時の思い出となっております。

【俳句】

月の宴

牧野春駒

袋掛して神の辺の白ふやす

蚊遣に火点じて神事はじまりぬ

形代にまた死を越えしわが名書く

文化協会観月会

いのち得て月の宴に侍りたる

山門に末枯の野の入り込める

茎桶の間を出づればすぐに湖

地震過ぎし地の安らぎに蝶凍つる

玻璃の外に湖横たはる朝寐かな

蛇穴を出て落慶を目のあたり

麻疹の子花の玻璃戸に閉ぢこめて

冬の川

伊藤柳紅

水ナ底を踏む指ひらき水遊
蜻蛉の透けゐる翅も影を持ち
冬川に影を落して橋渡る
凍蝶の紋見ゆるまで翅ひらく
芝を焼く熊手に載せて火を運び

菊人形

上原高美

武者の顔眉だけ動く菊人形
終ひ茄子鋏入れるも心して
福寿草百才翁の笑じわ
ふりむけば長き歩みや注連飾
畦道に蓬の香りしかとあり

大和三山

大浦小枝子

大地震の被害伝へる初電話
膝に土つけてもたらす蕗の薹
着ぶくれてピアノ弾きゐる老の午後
宮跡を大和三山笑ふ日に
玻璃越しに見し初蝶を目で追ひし

渚

岡良子

河骨の花の光の沼にあり
炎昼の塩湖の渚塩をふく
靴底の湿り冷えきて汀去る
寒卵手術控へし夫に割る
巣の底に亡骸ひとつ燕去る

寒牡丹

柏木一枝

こころして庭に育てし若菜摘む
持ち寄りし端布に雛の生れけり
木の芽和一品増えし夕餉かな
球根は土に預けて鵙の空
寒牡丹十三塔により添ひし

震災

川口シズヱ

震災の話ばかりに春隣
遠くより手を振る人や針供養
臥床にて踊りの唄の聞こえくる
大安にしるしつけある古暦
熟れ落ちし柿の勾ひの中にあり

夏蓬

喜多アサ

雛の日の風に乗りくるわらべ歌
花の下娘はフヰルムを入れかふる
下駄箱に履かぬ桐下駄夏蓬
栗飯の湯気高かりし誕生日
末席につきて手袋ぬぎにけり

雁渡る

木村長子

清貧や七草といふ粥啜る
をみなとはむかしのことよ端居して
雁渡る大黒柱ある暮し
啼くだけが命の鵜を羨みぬ
中将尼寒牡丹の咲き候

登山杖

込山山歩

胸高に袴結ばれ弓始め
田楽や相撲(すもう)番附貼り出され
遭難碑片手拜みに登山杖
お十夜にちぎれ散ったる数珠の玉
飛火野に画架を立てゐる冬帽子

山笑ふ

坂本よしゑ

大和棟本家分家の鳥總(とぶさ)松
紀ノ川に添うてゆくなり探梅行
遠目にも笑ひそめたり信貴生駒
足病める媼作りし夏野菜
白壁や茶筅(せん)の里も豊の秋

月を待つ

辻田しま代

四畳半勝手気儘(ままま)に暦果つ
昼寝覚めテレビの銃が我狙ふ
香炉買ひし事は内緒に月を待つ
袁札に士族と書きて山始
浮寝鳥パイプオルガン聞こえくる

新暦

中川君子

干支(えと)の絵の微(かす)かに匂ふ新暦
福笹を掲げて匂ひ部屋に満つ
旅人の顔で餌をやり奈良小春
豌豆の蔓の虚空を摑みをり
くしゃみして編目をはずし春寒し

寒の雷

南村照栄

毛糸編む童話の世界編み込んで
地震のあとどこか軋むや寒の雷
鐘一打して囀のとぎれけり
石を割る木の根すさまじ春立ちぬ
吟行も一期一会や寒牡丹

阪神大震災を悼む

西岡智子

かまきりの合掌のまま枯れにけり
暖房を強い目にしてギブス干す
柏手の打てず淋しき初詣
地震の地に電話通ぜず寒の月
捜索犬頼む凍土の埋れ人

里まつり

西田たまみ

指先につまめる程の蓬かな
キウイーの蔓の放埒梅雨明くる
人の名を屋号もて呼ぶ里まつり
蒲の穂の片側ふくれきて飛びぬ
父祖の墓しづもる山も眠りけり

寒椿

西山佐代子

寒椿家失ひし垣根かな
月冴へて傾く家の影暗く
震災の身替り雛となりしかな
水仙花仮の住ひも定まりしと
落雲雀被災地の子に笑みもどる

穂芒

平井咲子

アイロンの滑り愉しや余花の雨
恙なく老いし二人に山笑ふ
風薫る白髪に櫛の目を入るる
穂芒の風のゆくへの道白し
短日の大工が庭に灯を吊す

凍蝶と

藤澤陽子

追剝ぎの出さう露草両側に
湯豆腐や足にギブスの重みあり
初日記犬も元気と書き添ふる
六道の辻に迷へば亀の鳴く
凍蝶と若草山の風の中

落花

福井としみ

舎利殿の花の天蓋より散華
御廟所の落花一片づつ沈む
散り急ぐ花の天蓋義士の墓
濠の底までも天守と貴妃桜
心字池埋む落花の無住庵

冬の蝶

堀池敏子

たて笛を涼し音色と聞きにけり
窯元を出れば肥前の柿の秋
我が影の垣根過ぎゆく冬の蝶
そのまろみ触れてみたくて寒雀
月次の祭に会ひて椿かな

鼻の穴

牧野和代

剪定のあれは女人とわかるまで
金泥の心経かかる朝寝かな
朝寝して五体連がりゐたるなり
畦火いまコーヒー店に近くあり
旱魃の畝の匂ひす鼻の穴

龍の玉

三井サチ子

探梅の沖の白波顕ちきたる
電話にて母の安否を龍の玉
雑巾で拭く優曇華も夕映えに
座布団を干すベランダの秋の蝶
相続のやうやく決りお茶の花

短夜

森田陽子

レイかけて空港の朝初雀
外つ國の椰子を望みて初湯かな
山羊ひきしロシアの乙女鬼薊
短夜は亡き人恋ひてピアノ弾く
水仙の花かたむけて余震去る

桐の花

和田美代子

神苑に対の灯明春立ちぬ
かたまりて角なき鹿の息白し
蠟梅の黄に日のぬくみありにけり
桐の花湖西の旅の通過駅
「夢」といふ店に入りぬ年のくれ

【漢詩】

噫　南溟戰場

餓羸激鬪極辛酸
巨萬將兵空殉難
堪聽南溟征戰跡
啾啾鬼哭恨無殫

片桐　一夫

餓羸（がるい）　激鬪（げきとう）　辛酸を極（きわ）め
巨万（きょまん）の将兵　空（むな）しく難に殉（じゅん）ず
聽（き）くに堪（た）えたり　南溟（なんめい）征戦の跡（あと）
啾啾（しうしう）たる鬼哭（きこく）　恨（こん）　殫（つ）きる無きを

捧　師兄

温良如玉靜思深
清白忠貞克自任
堪惜南征當難斃
憶君惆悵眷親心

温良（おんりょう）　玉（たま）の如く　靜思（せいし）深く
清白（せいはく）　忠貞（ちうてい）　克（よ）く自（みずか）ら任ず
惜（お）しむに堪（た）えたり　南征（なんせい）難に当って斃（たお）る
君を憶（おも）ふて惆悵（ちうちょう）す　眷親（けんしん）の心

偶感

天災の中に拾った一粒の真珠

木村長子

菜種梅雨の四月にしては今日はまた滅法よい天気。隣家の杉が野放図に伸びて屋根を圧しています。

あの、日本中を震撼させた阪神大震災から、知らぬ間に月日はすぎて輻輳した人々の感情も、薄紙を剥ぐように次第にそれなりの思いの中に、沈積してゆきつつあるように思われます。

私にとってのあの日の感銘を書くには、最早や時効かとも思いつつ——、いや、やはり一つの心の糧として書き留めておこうと思い直しました。

＊　＊　＊　＊

今回の阪神大震災が突発しましたのは、去る一月十七日の午前五時四十六分！

そして、朝日新聞奈良版に、奈良市役所が義援金と毛布の受付を開始したと報じましたのが同月十八日。この記事を見て、とても市役所までは無理だけれど、こんな非常時だから、ここ出張所でも取扱っているかも知れぬと、十九日に出向いて尋ねてみたところ、大分待たされた挙句の応答が、やはり本庁まで持参してほしいとのこと、規格通りの行政、《それも、良し》と、踵を返そうとした時でした。

どこからか現われ、

「私が預かりましょう。」

と言ってくれた女子職員がありました。

全く予期せぬことに驚きながら、

「しかし、ご迷惑がかかっても——。」

と、躊躇するのに、

「いいえ、私が個人としてお届けします。」

と、はっきりとした返事が返ってきました。
私は、なおも逡巡しながら、
「それでは、明朝持参しますので何卒よろしく。」
と約束して、翌二十日、老人の手には嵩高い新品の毛布二枚と、心ばかりの義援金の包みを持って、再度出張所を訪れました。このようなことは、匿名でと決めていた私ですが、「是非に」と言われたので、住所・氏名を書きました。
ところが、二十一日。驚きました。住所・氏名を書き残した為であろうか、わざわざ訪ねて頂き、奈良市長発行の領収書を二通届けて下さいました。
私は思わぬことの二度の御厚意に、胸にこみ上げるこの感激を、せめて、何とか伝えたいと、失礼とは思いつつ、私には少し派手になった上質のブローチを使って頂きたいと申し出たのですが、
「お気持ちだけをいただきます。」
と爽やかに固辞されました。
そして又、私も素直に公務員としての彼女の矜持を大切にしたいと思いました。
彼女の名は『南畑さん』。
兎角、現代の若者たちに、希望を失いかけていた私の偏狭な若人観に、彼女は見事に開眼の光を与えてくれました。
それは今回の大震災に際しましても国内の多くの職場から、また学窓から、彼ら自身の迸しる赤心で、ボランティア活動に埋没している青年男女の姿とも重複してゆきます。
日本の心はまだまだ失われてはいなかった。悲しい悲しい大試練の天災ではありましたが、その修羅の中で拾った一粒の真珠!!
そして、世界各国からの有形無形の援助の手にも、ただありがとう、ありがとう、と心の中で叫びつつ、一日も早い被災地の春を待ち望んでいます。
知名学者の言の如く、人を救うのは人しかいないのです。

（平成七・四・四　わたしの雑記帳より）

【短歌】

シルクロード紀行

網干善教

岩肌の渓ゆく山羊の一群に落日映ゆるガンダーラの秋

天竺に往く僧伽たち命かけ踏みわけ越えしカラコラムの山

カイバルの峠越ゆればアフガンの旗ひるがえる国境の橋

草むして廃墟となれりタキシラの崩れし石にありし街しのぶ

人の波馬まぜかえるペシャワルのバザールに買う遊牧の民

春日なる奈良の都に十六夜の月待つ宴楽しかりけり

まほろばの平城の地に移り住み盟を結びて生きる今われ

日々新らた望をもちつわが友よまほろばの地に明日の夢みる

送り火の左の文字は山に燃え半月も冴ゆる京の今宵は

衣笠の山に炎の大文字京の夜空になき人しのぶ

緋の鯉のぼり

荒居智子

コロラチュラの歌うごとくに千粒の桜ん坊高枝にそよぎておりぬ
手をそれし緋の鯉のぼり三階のテラスより空におよぎいでたり
ときながく大和の空を焦がしいる夕焼は過ぎし幸のいろ
おうす呑むかたえの廊を歩み去る乙女の踵ににじむくれない
大歩危の駅舎の内に火鉢ありて豆炭の熾とろとろもゆる

七十路の春

宇野木久代

城を背にみだれ咲きたる梅の花私が主役と香を風にのせ
音一つせぬ会場は澄みており尺八の音に酔いて目をとず
行きつけぬ演奏会にさそわれて老いてうかれし七十路の春よ
コンクリの上にすずめは餌を食むじゃませぬ様にと遠廻りする
満開の「菊シャボテン」はくりかえし夕べにとじて朝待ちひらく

円空仏

大浦　小枝子

そのむかし樹樹に仏を求めたるさすらひの僧円空の祈り
切られたる幹の一部に目鼻口穿たれ仏となりし不思議よ
舗装路に描かれし線路の行く先はマンホールの蓋終着駅です
「ちいちゃんが空襲で死ぬおはなし」の音読終へし子わっと泣き出す
大地震の被災者の声伝へゐるアナウンサーの顔涙流るる

春の気一本

岡田　越子

山の辺の道につくしを見つけたり春の気一本先取りをする
宇治川のせせらぎの音の「琴の道」ゆきて茶席に抹茶を頂く
電車にて席ゆづられて嬉しくも歳になりたる淋しさもあり
気づかずに人を傷つけること云ひて大事にならずも恥ずかしと思ふ
わが怪我の少し長引くもよしと思ふやさしき嫁の世話に甘えて

卯月なかば

片桐一夫

戦陣に斃れ散りにし君懐ふ卯月なかば李花の咲くころ
遼東のアカシヤの花のそよ風に揺れて馥るを愛でし君はも
亡き君の思い出胸に詣でたりリラの花咲く奈良のみ寺に
西征に南征にとぞ外つ国の山野を駆けし青春我ら
我ら青春何なりしかと戦友と語り奈良の春夜を宿に明かしつ

翁舞

木庭和子

奈良坂の奈良豆彦社の翁舞たうたうたらり村人の舞ふ
杏きよりうけ継ぎ来たるひなぶりの面たのしもふくらに笑みて
千歳の口上述ぶる少年の張りつめし顔しろくいぢらし
青年は黒き面の三番叟千秋万歳舞ひ納めたり
十重二十重舞台をめぐる人の顔大夫の所作のままにうごきて

サリンテロ

久門冨美

許すまじ言葉も失ふサリンテロ事件はつづく春浅きあした

人送りひと送りては一人焚く「をがら」は盛れど悲しみもなし

寡婦と言ふ名を負ひ生きし歳月の過ぎて思へば傷だらけなり

命生き八十歳も終るべし幸せはこのかなしみのなか

老いたれど日日健やけく詠みつぎいし歌にこもりて命の光る

激甚災害に思ふ

沢田実子

空襲の炎に追われ逃惑いし思い重ねてニュース見詰むる

生きながら焼かれし人もありしとふこの世の地獄に言葉なく祈る

行楽の朝に晴れるを願いしに芋の苗植え雨の待たるる

雨上がり小さき花咲く雑草に抜くをためらひ隅に残せり

古稀迎え良き友あまた恵まれし日々健かに趣味にいそしむ

一月十七日（早暁）

玉置小代

駅ビルもしゃれたデパートも崩れ落ちわがふるさとの廃墟となりし日
国も揺れ心もかわく寒き夜に祈りつつ聞く「バッハチェロ組曲」
今もなほ五時四十六分に目ざむとふ消えぬ恐怖が友の言葉に
いのちありてあひ得し友と旅に出る春光あわく山里はみどり
旅からの帰り待つかに牡丹花はみごとに咲きいて夕に散りゆく

ガレキ掘る夫婦

中川都哉子

「漂泊の思いやまず」とうたいける芭蕉読まんと新春（はる）をこもりぬ
「漂泊」のことばひとつにあくがれしわが若き日のまどいなつかし
奥能登の海に雪片の舞いにける春浅き旅が別離となりき
痛ましき被災のニュース坐して視るわが安穏の安らかならず
二人の娘（こ）の思い出の品をと背をまるめガレキ掘りいる夫婦哀しも

神野山（こうのさん）

藤原　香

神野山落ち椿踏み山めぐり鶯の声山にひびけり

神野山汗して登りし展望台で四方の景色胸打ち眺む

水音のかすかに聞ゆ鍋倉渓（なべくらけい）耳をすませば小リス走りぬ

さりげなき玄関入れば華麗なる能舞台にて仕舞（しまい）舞う見ゆ

震災もサリンの事も知らぬげに白と赤とのボケの花咲く

ながらへて

松尾　すみ子

被災者の心情忍び胸痛む吾が引揚げし当時うかびて

ながらへて花嫁姿の孫を見き幼き頃の面影（こ）うかぶ

息子と孫の婚儀に着たる留袖も着納めならんや愛惜覚ゆ

難聴も禿げも歯抜けも気にならず話に花の咲きて日暮れぬ

「生きるのがしんどなった」と云ひし母を感じる歳に吾もなりたり

大和路　花の春

松村　せつ子

春浅きぼたんの寺を訪ぬれば静けき庭に寒あやめ咲けり

春来しと芽ぶき始めしぼたん花人影もなき弥生の御寺　（石光寺にて）

対岸の御仏様も楽しむや花咲きほこる大野寺の春

大野寺の境内埋めし桜花そら見上ぐれば雪ふるごとし

山桜白木蓮の花間より朱き塔見ゆ春の九体寺　（浄瑠璃寺）

メリーゴーランド

森田　陽子

人を恋うとほむらのごとく言い捨てし女（ひと）たずさうるシャコバサボテン

メリーゴーランドのメロディ絶えず病癒えし幸噛みしめて夫に手を振る

プロポーズの言葉は内証と娘（こ）の言えるクリスマスキャンドル輝やく夜に

一票を投じて帰るさ見上ぐれば山桜雨に光れるごとし

ゆくりなく満州野に迷う心地して白きリラの香深く吸い込む

湖北の浜辺

山崎　たみ子

天草の山の奥地の天主堂に西欧文化の崇高さ見る
観音の像に十字架ひそませし隠れ信徒の苦難を偲ぶ
いじめ受け自殺したりし少年の遺書に相手をかばう文字あり
大震災の今夜も月は何事もなきかの如く煌々と照る
打ち寄する波音さやかに優しくてわが鬱癒えゆく湖北の浜辺

『寄せ書き』

棉源　瑛子

被災して五十日余を転校の孫けふ思ひ出の学び舎を去る
あたたかく被災の孫を抱きくれし神功小に感謝尽きせず
『多分もう二度と会えないと思うけど神戸でもがんばれよ』帰神の孫への寄せ書きのあり
『神戸へ戻ってもオレのこと忘れるなよ』孫への寄せ書き目をうるましむ
さま変りせしと思いいし今の子らの友情あふるる寄せ書きの文字

グループからの便り

歴史教養講座

大工美智子

エーッ！　私に書いてってー　ウーン困ったなー。手紙すら書くのが嫌いなわたしになんでお鉢を回したん。ここから先は読まんといて下さいと、お願いしたい気持ちです。

毎月第二火曜日午前十時から始まる歴史教養講座は、網干先生の巧みな話術に引き込まれ、二時間がまたたく間に過ぎていきます。

前半に聞かせて下さる時事教養、そして私達が平素何げなく使っている言葉や文字の一つ一つに深い意味がある事など。例えば今年二月の講座でうかがった「松ヶ丘」「雲雀ヶ丘」などの『ヶ』とは何か。ちなみに『ヶ』は箇の竹かんむりの一つ（簡略字）との事です。『あの』『その』『そこ』などの意味があり、松ヶ丘は松の生えて

いるその丘を意味すると説明して下さいました。また同じ日、物の数え方がどのような語源によるものかなど大変わかり易く面白く教えて下さいました。この講座にいらっしゃってない方。手袋の数え方を御存知でしょうか。一双二双と言うそうです。何の疑問も持たず、習慣的に使っている文字のなりたち語源などに大変興味がわいてきます。

後半の古代の歴史は、日本書紀の崇峻天皇紀を教わっています。戦前戦中に学校教育を受けた私は、

『万世一系の天皇、国を統治す』

『あやにかしこき天皇（すめらぎ）は、唯一現人神（あらひとがみ）であらせられる』

と教えられ、当時の純心な乙女はそれを信じて疑いませんでした。はずかし乍ら、奈良の土地に移り住むまで古代の歴史を殆ど知りませんでした。ましてや皇位継承をめぐって繰りひろげられたすさまじいばかりの血の相剋など、知る由もありませんでした。これまで難しい日本書紀はごめん蒙むるとしか思っていませんでしたが、正しい歴史を習ってこなかった私にとって今、書紀の記述は興味で一ぱいです。先生から戴いた天皇の系譜とにらめっこし乍ら、遠い古代に想いをはせて学んで居ります。現代の人に一番馴染の深い聖徳太子も随所に登場してきました。もうすぐ最初の女帝推古天皇紀に入ります。いよいよ飛鳥時代の幕明けです。

歴史教養講座に出席して、網干先生のすばらしい教養と豊富な知識を共に学ぼうではありませんか。

囲碁同好会

中村　正雄

『筋　と　形』

勝負事には常に、攻めと守りの両面を包含しており、攻めるべきときは攻め、守るべきときは守る。

一見あたりまえのようですが、これを巧に組合せることより戦術を立て局面を有利に導いて行くことが重要です。

攻めと守りのことを囲碁では「筋と形」と呼んでおります。

筋とは攻めの急所を指し、自分がこの急所をついた以上継続して、彼我の応接がある程度展開されるのは常道であって、仕掛けた側に当然有利の帰結が約束されます。

形とは、守の急所であって、筋の積極性で動的であるのに反し、消極的であり静的であるところに大きなちがいがあります。

そして形には一手で姿勢を整えるとか治り形に就く、という保守的な最善手である関係上、その一手によって部分的な折衝は一旦、打切られる場合が多いのです。

勝負事にはよく性格が出ると言われますが、実際打ってみますと、先手、先手と攻めの得意な人、攻められると必死に守りを重視する人、いろいろであります。

どこで攻め、どこで守るか、これのバランスをとるのが非常に難しい、その一手、一手の攻防が終局まで続きます。

あそこでこう攻めていたら、あの時こう守っていたらと一局の碁が終るたびに反省が残ります。

手筋を連発し、相手の防御を押えこんで勝に至った場合、このように手筋を覚え、守りの形を整えながら実戦を積むことにより碁はだんだん上達していくものと思います。

「筋と形」人生面において、あてはめてみても面白いのではないでしょうか。

。同好会近況について

毎年、春、秋と年二回行われている「奈良市親睦囲碁大会」が今年もさる四月二十三日（日）に、奈良市中央公民館において開催されました。

参加チームは、市内の各公民館で囲碁活動をしているチーム同士によって行われます。

今までにも優勝、準優勝と何度もし優秀な成績を収めてきましたが、今回も「平城西公民館チーム」が優勝いたしました。

通常平城西公民館における我々の活動は、毎週日曜日午後一時から六時までの仲間同士の対局、春秋行われる大会、一般対局中のリーグ戦による昇段、昇級の認定、又プロ棋士中嶋先生に隔月毎おいで戴き指導碁等も実施しております。

皆様方の御参加を心よりお待ち申し上げます。

木目込人形・押絵同好会

谷口　直子

会誌『層富』の真新しい号が手元に届き、一年間の作り上げる作品の発表となる菊香る文化祭が、わが人形同好会の締め括りの節目で、次の講座からは自ずと新たな始まりとしています。

文化協会に講座を持って十一年、入会の以前からだと十五年余り、相逢う方々は、一期一会そのままに数知れず、多くは人生の諸先輩にお人形を通して、いろんな方の生きる知恵を頂いて続けて参りました。

大阪から約一時間半、車中から見える四季の風景を楽しみに、増してや、集うメンバーの魅力にひかれ、導かれて、人形を知ってからの二十年に、金糸を縦横に使った金襴の布のように、手の平に馴染んで軋む本絹の布のように、華を感じての短い十一年の気が致します。

その間には、大きな谷もいくつかあり、ここで終焉かという時期もありましたが、ことさら大きな縁を神様から賜ったようで、これからの人形同好会を私の五十歳の新しい旅立ちと思い直しています。

ゆっくり、じっくり、いいお友達をと、お探しの方、第一、第三の水曜日、北部出張所を覗いてみませんか。愛くるしいお人形と共に、お持ちしております。

拓本を楽しむ会

西山佐代子

普門品ひねもす雨の桜かな　鏡花

東京谷中で、娘が採拓してから、かれこれ二十年になります。一度拓本を手掛けたいものと思っておりました。不安ながらも入門いたしました。講師は、前会長の渡辺氏です。日拓に所属され、展覧会にも入選されました。適切なお教えを頂き、道具も揃えました。タンポも大小作り、又、四角のタンポの作り方も習い、とても重宝しています。皆それぞれに手造りのタンポを、使用しています。採拓する度に情けない思いをいたします。紙が悪いとか、墨が悪い、又天気のせいにしてこぼします。要するに石碑に、拓紙を真直に、皺を寄せない様に、水張をします。これが一番の決手であり、第一関門です。矢

張り一枚でも多く採拓して、なれる事でしょうか。

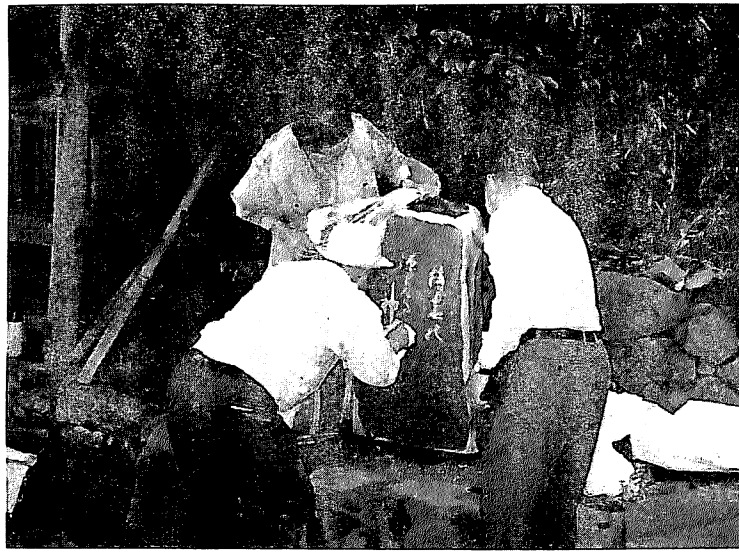
採拓にも好みがあります。淡墨にしたり、又濃くしたり、全面打にする事もあります。歌を選び、又書体を選ぶ楽しみ方もあると思います。現在込山氏を会長に、宗徳氏を長老に総勢三十人になります。野に山に、一泊二日の採拓旅行も楽しみの一つです。七つ道具を背負って、元気に出掛けて行きます。むずかしく考えないで、是非一度、御参加ください。歓迎いたします。

飛鳥坐神社にて

膳所芭蕉会館付近にて

平成六年度　活動状況

1　四月十四日（木）――十五日（金）
　洲本市第三文学碑林採拓　一泊二日　十一名
2　五月十六日（月）
　飛鳥坐神社　十三名
3　六月十七日（金）――十九日（日）
　作品展　平城西公民館　四十二点　二十二名
4　十月七日（金）
　桧原神社　十一名
5　十一月四日（金）――八日（火）
　文化祭　作品展示　三十一点　二十六名
6　十二月八日（木）
　昆陽池　五名
7　七年一月十三日（金）
　新年会　レストラン「エルバ」十九名
8　一月二十七日（金）
　北部出張所会議室　立体拓
9　二月十日（金）
　北部出張所会議室　立体拓
10　三月二十四日（金）
　滋賀県膳所本町　芭蕉会館附近　十名



飛鳥坐神社にて

古代史講座

廣田　好實

右京四丁目の住まいから、はろばろ東京のキャンパスへ通う歴史学者が一人居てはります。その方の名と現職は鬼頭清明・東洋大学文学部史学科教授。

肩が凝るほどに難解な学術論文集、東独を始め海外各地でのシンポジウム発表報告書、さらに素人の古代史ファンが「なるほど」「そうだったのか」とすらすら理解できる歴史解説本……と数えあげてゆけば氏の著書は多数、いや無数。九三年三月が初版の『日本古代史研究と国家論――その批判と視座』（新日本出版社）はその一冊。奥付で著者の横顔を次のように紹介しています。

一九三九年東京都生まれ　東京大学文学部国史学科卒業　奈良国立文化財研究所歴史研究室長を経て一九八八年から現職

この鬼頭先生を講師に頂くのが古代史講座。まな弟子の光栄に浴する常連受講者は二十～三十人。月に一度、原則として第四火曜の午後二時市北部出張所会議室に集まり、いまは約二時間『続日本紀』（平凡社・東洋文庫の口語訳）についての解説を承っています。

先生がまず区切りのよい数節を音読し、講釈を加え、次いでその部分の質疑応答タイムをたっぷり取ってある

のがこの講座の特長。時にとっぴな質問が相次ぎ、温厚篤実、謹厳実直な先生をてこずらせることも再三で「古代史講座は狂心（たぶれごころ）の会や!!」と評する人がいるほど。

鬼頭教授も人の子。たまさか講座を無断？欠席されたことがあります。でも、そこが狂心の会。集う面々は慌てず動せず、即〝雑談会〟に切り替えて貴重に時を過ごします。そんなある日の雑談会での発言 ——

「私、もうこの齢（とし）でしょ！ 今の講義のスピードだと、続日本紀が終わらぬ先に天寿が尽きるのではと心配。先生に『奈良朝以降はエキスだけに絞って』とお願いしよう思うのやけど、いかが？」「同感。教わりたい本は、六国史に限ってもまだまだおますさかい……」

文化協会員の中でたぶれごころに共鳴できそうな古代史ファンの方、参加ご希望なら直接講義会場へお越しください。いまなら多少の余席がおますよってに。春秋には史跡の現地探訪会も催され、興趣は尽きません。

フランス語講座

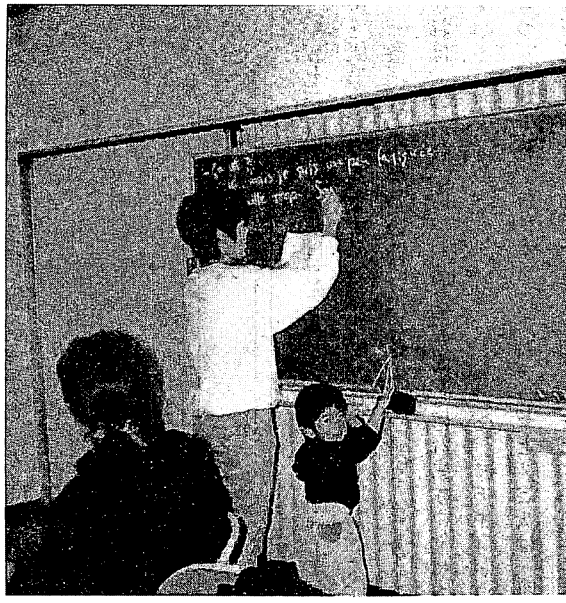
川口 智子

フランス語講座の様子は、これまでの『層富』でよく知られていると思いますので、今回は私の個人的なドタバタ受講ぶりを記させていただきます。

月曜の朝。先生から出される宿題や予習をバッチリ（？）こなし、準備は万端。ルンルン気分で講座に出発、と思いきや、荷物が「おしっこ！」。そうです、私は子連れ受講生なのです。しまった、今日も遅刻だ……。

生後四ヵ月の息子を連れて、厚かましくもクラスに通い始めたのは、二年前の五月でした。それまで静かに学習されていた中、私たちのようなクラスメートが増えてたいへん困惑なさったことと思います。他の人の話される事を聞き取るために、耳を澄まさなければいけない性格の授業です。一歳頃までは、子どもが泣く度に、唯一の男性である片桐さんの隣でお乳を上げながら質問に答えていました。その後は出来るだけ機嫌を損ねないよう、しかし機嫌が良すぎて騒がないよう、あの手この手を使いながら、なんとか毎回通っています。

「そんなにしてまで」と思われるかも知れませんが、ここには、たとえ一〇〇パーセント集中できなくても、通い続けたいと思う魅力があります。素晴らしい先生、生徒の皆さんの熱心さに接するだけで、元気になります。ちょっと脱線した時に伺える日仏比較話に、目が輝きます。少しばかり昔の話に花が咲いた時は静かに、そしていまどきの話の時だけは、私もおしゃべりになります。ここは私にとって、子供が一緒でも「オカアチャン」以外の「私」を確認出来る、大切な場所です。



平城ニュータウンに住む若いお母さん達にも、もっと文化協会の存在を知って欲しいと思います。もしかしたら知っているのだけど、小さい子を抱えて自分のしたい事をすることに、罪悪感があるのかも知れません。子供の預け先を考えるだけで諦めているのかも知れません。私は時々、託児付きの講座や講演会の手伝いで、子供の保育をすることもありますが、「学びたい」と思っているお母さん達はたくさんおられます。『層富』の第十号の中で、鎌田先生が、米国のＹＷＣＡに低料金の保育が付いている様子を書いておられましたが、文化協会でも一つの講座に一定の保育の必要な方が出てきた場合、考えてみてもよいのではないのでしょうか。その時は、ご連絡いただけたらお手伝いをさせてもらいたいと思います。

最後になりましたが、フランス語講座が始まって以来七年間、高橋先生と共に私達をご指導いただいた根来先生が、この春から大阪外国語大学に編入なさる事になり、

替わってベルサイユ留学の経験者である久保さんに教えていただいております。これからもしつこくコブ付きでがんばりますので、宜しくお願いします。

野草をしらべる会

前川　良雄

平成七年はオウム真理教と阪神大震災であけました。でも野草は三月を迎えると緑の芽が出て花を咲かせます。

一番早いのがかわいい紫色の花の咲くイヌノフグリ、これは犬のあれに似ているのでこう呼ばれます。他にカタバミ、血トメ草、ミミナグサ、ハコベ、ヨモギ等がつぎつぎと芽生えてきます。中でもチガヤとノビルは一段と背を高くのばします。チガヤの花がまださやの中にある時中の花を取り出して食べると甘くてやわらかでなんともいえぬ味がします。ぎしぎしやスカンボは同じく食べられますがすっぱくて違った味がします。山でとれる山イチゴはおいしいですが、ヘビイチゴはいかにも毒々しい色でヘビが食べるといわれています。セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロこれぞ春の七草といわれます。他にスズメウリ、スズメノエンドウ、スズメノカタビラ、スズメノチャヒキ、スズメノテッポウ、スズメノヒエ、スズメノヤリ、等があります。キツネアザミ、キツネカミソリ、キツネノボタン、キツネノゴマ、があります。イヌガラシ、イヌゴマ、イヌスミレ、イヌタデ、イヌナズナ、イヌノフグリ、イヌビエ、イヌホホズキ、イヌムギ、イヌヨモギ等があります。イヌやスズメのことばのついた野草はつまらないというたとえにつかわれています。ヤエムグラは七重にも八重にも葉がかさなって生えるところより名づけられました。子どもの頃ヤエムグラを一つ一つちぎって胸につけて勲章だといって遊びました。角力とり草として遊んだのはオヒシバとオオバコです。オオバコは葉が横に大きく開いているのでそう呼ばれます。野草にはそれぞれ子供の頃に遊びにつかった思い出があってなつかしいものです。ぎしぎしやハコベはにわとりの餌としてよくとりに行きました。山菜のゼンマイやワラビ、ツクシ等も山歩きしながら取ってきました。クローバーは和名ツメクサといわれ物を送る時にすき間につめて使われたのです。血ドメ草は葉の汁を傷につけると血が止まります。

セリはお互いにせり合って延びるのです。スミレは大工さんの墨入れに似ているところより名づけられました。ヘクソカズラは悪臭がするのでへという意味です。

本年の野草の会は七月九日（日）午前十時半と十月八日（日）午前十時半、右京集会所で開きます。入会される方は五月下旬までに電話で申込んで下さい。新しい名簿と連絡網を作りたく思います。電話は七一局の六八二番の前川でございます。

詩吟の会

西岡　智子

詩吟とは？　むずかしい漢詩をどのようにふしをつけて歌うのだろうかと好奇心で入会して早や八年が過ぎました。教材の万葉や漢詩のプリントを頂きその都度年代背景や作詩者の経歴等わかりやすく説明して下さいますので居ながらにして歴史の風景の中を愉しむ事が出来ます。一昨年漢詩の故郷中国にツアー旅行しました。美術館、書店、レストランには必ず漢詩の掛軸がずらりかけてあります。詩吟を習う迄は皆目読む事が出来なかったのですがお陰様ですらすらと読むことが出来、同行者の称賛の的になりました。そして「詩吟とはお腹から声を出すから、特に吐く息を長く続ける事は健康にとても良い事です等々」と得々と披露しました。忘れられないのは漓江下りの折ガイドさんが「有名な杜牧の『江南春望』さながらの風景の中を終日舟の旅をします」と言われ二人で「千里鶯啼いて――」と朗吟しました。声は両岸の山々に響き村落には赤い酒舗の旗がはためいて居りました。行きかう小舟の漁師さんも耳をそばだてて居られるようでした。この感激は詩吟を習って居たればこそと嬉しくなりました。詩吟の会では春秋に万葉や漢詩の名所旧蹟を尋ねての歴史探訪やなごやかな新年宴会、ちょっと緊張の競吟会や他流仕合など多彩です。新会員も大幅に増え毎月第一第二第三水曜日の午前・午後に分かれて御指導を受けて居ります。博学の吉本提瑞先生、美声の大迫くき枝（提伯）先生の御指導よろしきを得て本年度の競吟会でも新会員の方達が上位入賞されました。

健康づくり・ストレス解消・若返りのため御入会をおすすめ致します。

詩吟の会

地酒を味わう会

中村　正雄

〝済州島二泊三日旅行記〟

。旅へのいざない

早朝激しい雨音で目を醒す。初めての海外旅行を前にして、携行品等の再点検をする。

激しかった雨も上六に着いた頃にはあがり、午前十時三十分発のリムジンバスにて関西空港へと向かう。

バスは谷九より直ぐ阪神高速道路に入る、弁天町付近アークビルを右手に見ながら湾岸線へ南港の風景が目に飛びこんでくる。最近オープンしたばかりのコスモセンタービルが際立って高くそびえていた。

堺の市街地を通りバスは快調に飛ばす、忠岡、岸和田を過ぎると突然海上の霞の中に浮かんだ関西空港連絡橋が墨絵のようにもやの中に姿を現す。

午前十一時二十分上六より約五十分で関空に着いた。

早目の昼食をすませ、搭乗券の受領、出国手続き、手荷物検査等の手続きを済ませ、免税店にて若干の買物をした後は搭乗を待つばかりとなった。

。機内からの風景

搭乗機は大韓航空七五一便である。搭乗後、機は空港端の滑走路スタート地点まで廻り込んで来た、エンジン音が急に高まった、速度を増す轟音と共に地上より浮き上がった、離陸の瞬間である。

ついに飛んだ地上より離れた機体は角度をとりつつぐんぐん上昇して行った。私にとっては初めての体験だ。

私の目は機窓に張りついたままである。上昇し続けるとともに眼下の光景は巨大な箱庭のように拡がって行く、海面は鏡の如く、キラキラと反射し濃淡の変化が美しい。

突き刺すように雲上に出ると、一面雲海へと風景は変わる。さらに高度が上がると雲海は雪原のように見え、又気流の変化によって、積乱雲の柱があちこちに立ちあがり北極海の氷原のようにも見えてきた。

この頃になると機内にいても機体が静止しているごとくに感じられる。

あたりに対象物がないので、高速で飛んでいるにもかかわらず、スピード感はまったくない。

空の青さは地上から見た色ではない。透きとおった白

い青、淡い青、濃い青と単純にみても三色の青を感じた。
その時の気象の変化にもよるのであろうが、今回私が機上から見た眺めは、実にすばらしかった。

。済州島に第一歩

機は釜山経由で済州島に着く、入国手続きをすませ空港を出ると、旅行社のガイドさんが出迎えてくれた。
車で約十五分でホテルに着く。途中気が付いたことは島にしては道路の広いこと、しかし各所で道路補修工事が行われ、右側通行であること、日本車はほとんど見かけない、韓国産の現代、大宇、アジアといったメーカーの車がほとんどだった。
ハングル語の看板が目立つ以外、服装も顔立ちもあまり変わらず、特別外国に来たという違和感はなかった。
高層ビルもないが、日本の地方都市といった感じだ。
スチュワーデスは勿論、空港、ホテル、土産店等でもほとんど日本語が通じ、会話についての不便さはない。
ホテルに入り手荷物を整理、シャワーを浴びロビーに降りる。ガイドさんの案内で市内の海鮮料理店にて夕食第一日目は終わる。

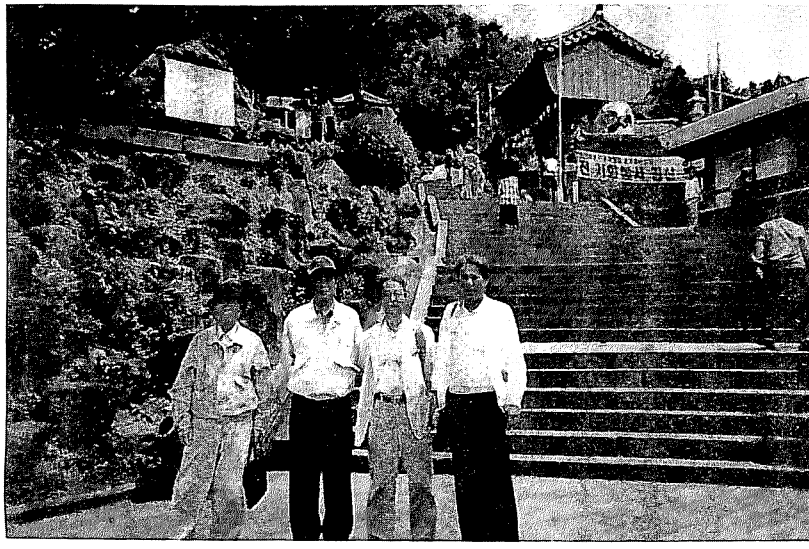
。観光地見学

翌日午前九時丁度ホテル出発、最初の目的地は車で約四十分済州島西側に位置する「翰林（ハンリム）」で溶岩洞窟と民浴村のあるところである。
噴火によって自然に出来あがった窟内は石錘と石筍が美しく、周囲の溶岩壁は奇石の連続で神秘的である。
天然記念物に指定されている、洞窟はかなり広範囲であるらしいが公開されているのはごく一部らしい。
民俗村の方は古い時代の民家や民具を再現したものであり、棟が立ち並び、長い島の歴史や文化風俗を伝えている。
次に着いたのが島の南西部にあり海に面した「山房山（サンバンサン）」である。後は切り立った岩石、前面はポッカリ浮かんだ島、廻りこんでる岬、海水浴場の砂浜とすばらしい景色である。
山間いのわずかな土地に「山房窟寺」があり本尊のまわりには数百におよぶ如来像が整然と安置されていた。
韓国では今が修学旅行の時期らしく、観光バスが立ち並び観光客で賑わっていた。

。射撃場にて

ここで昼食時間となり、近くの食堂にてキジの肉のシャ

翰林（ハンリンム）にある城邑民族村



山房山（サンパンサン）にて、後方に見えるのは山房寺の山門

ブシャブ鍋を摂り、食後すぐ裏にある射撃場に向かう。

係員の「ピストルを撃つのは初めてですか？」の問いに私は無言で銃を受け取り、射撃台で標的に向かって構える。三十八口径十二発入りのオートマチックを、撃つのは初めてである。

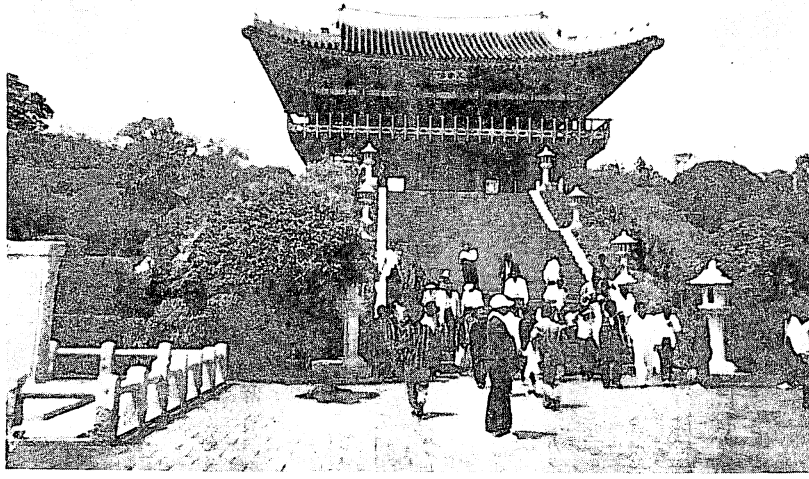
照準を合せしぼりこむようにして第一弾を発射した。標的を確認したが弾痕は見当たらない。しかし確かに手ごたえはあった。

私は心の中で「黒点に命中しているな」と確信した。反動はほとんど感じられなかった。弾がいつ出たかわからないように気持よく十二発をたて続け撃ちきった。

標的が戻って来た。弾は見事に黒点に集中していた。十二発中黒点をはずしたのは一発のみで十一発は黒点を撃ち抜いていた。

係員が標的に「名射手」のスタンプを押して手渡してくれ、ほかに氏名を自署したプレートを場内のボードに掲示し、「これは数年間残りますよ、今度来られた時でもあなたのプレートは残っておりますよ。」といってニッコリと笑った。

私は久し振りの射撃の結果に満足だった。



中文（チュンムン）観光地区にある天帝楼

。中文（チュンムン）、西帰浦（ソギッポ）地区

島内でも韓国政府が最も重要視し、国際観光リゾート化をおし進めているのが、中文地区を中心とする南海岸一帯である。

ここは天帝楼、仙臨橋、古寺佛閣の名刹をはじめ、海洋水族館、海水浴場、カジノ、ゴルフ場と観光施設にはことかかない。

駐車場などの設備のおくれ等は見受けられるが将来は大リゾート地帯となることと思われる。

本日最終の目的地は、中文より東に約二十分車で走った「西帰浦（ソギッポ）」である。

すきとおる水の青さ、ここも海岸線の美しいところで観光ホテル、パラダイスをはじめ別荘地としても知られている。

沖には島々が点在し、日本の松島を思いおこすような光景でもあった。

この後、漢拏山（ハンラサン）（標高一九五〇米）東側のすそのを通り済州市へともどり、観光第一日目の行程は終了した。

。市街地周辺の観光

第二日目は市街地を中心とした観光で、奇石、奇木を

集め陳列されている公園「耽羅木石苑」敷地は一万㎡の広さをもち、形象木と形態石の展示総数五〇〇〇点。「三姓穴」は高梁夫（コウリャンフ）という三神人が三姓穴より現れ、東から流れて来た女性と結婚し、農牧生活を営んで島を繁栄させたという、神話と伝説の場所である。

「済州道民俗自然史博物館」ここでは島内にある動植物、近海でとれる魚類、古来の暮しぶりや習慣、そして貴重な資料、民具などが展示されていた。

そして最後は、空港近くにある「龍頭岩」。海から龍が頭を持ち上げたような形をした奇岩、又この付近はアワビ等もよく採れ、時期には海女の姿もよく見受けられるとのことである。

。ガイドさんのプロフィール

最後に今回我々の観光案内に従事してくれたガイドさんについて紹介しておこう。

彼女は済州道西帰浦市の出身で今年済州綜合大学を卒業し、ガイド試験に合格したのち、世那旅行社に就職した二十二歳の女性であり、ガイドに付くのは我々が初めてとのことであった。

心のやさしいすがすがしい娘さんで、一生懸命ガイドしてくれているのが感じとられた。

日本には来たことがないとのことであったが、日本語の日常会話は流暢に話す。漢字は勿論ひらがなもカタカナも自由に読み書きできる。

これからの彼女の成長を心より祈りたいと思います。

「一期一会」という言葉ほど旅先で感じることはない。

今回は私にとっては初めての海外旅行であり同行していただいた諸氏には大変お世話になったことをこの場をおかりして心よりお礼申し上げます。

絵画クラブ

島川　正行

平成六年四月から、梶野先生を迎えて会員一同楽しみながら制作に取り組んでいます。

この一年、学研記念公園へ写生に行きました。教室で花や静物を描きました。アクリル画の三十号にも挑戦しました。マチエールの勉強もしました。そこで言いふる

されてはいますが、いいことずくめの『絵画十得』をご披露します。なるほどとお思いでしたら、入会をおすすめします。ただいま会員は二十二名です。

一、季節の移り変わりに敏感になって一年中感動できること。
一、色彩感覚が豊かになって服装のセンスが磨かれること。
一、いつもきれいで新鮮な気持ちでいられること。
一、現実よりもっと美しいものを創造できること。
一、浮き世のアカを落としてくれること。
一、気持ちがやさしくなること。
一、カドがとれて円満になること。
一、名画に接する機会が増えること。
一、探求心が旺盛になって新しい発見ができること。
一、国内旅行、海外旅行がもっと楽しくなること。

とりあえずこのへんで。次回につづきを申しのべます。

筥作りの会

Y

層富の古い本をひっくり返して読み返して、もう「筥」の会も五年目を迎えたんだと、あらためて驚き、この会の存在にあらためて感謝しています。

発足の始めに、先生の作品を拝見して、あまりに完成度が高く、その美しいのに驚きました。そんなわけで、ただの「箱」では気持ちがすまないので、「玉手筥」と同じ「筥」を作るつもりで、「筥」と言う字を当てることにしよう、と相談がまとまり、「筥作りの会」と命名したのを記憶しています。

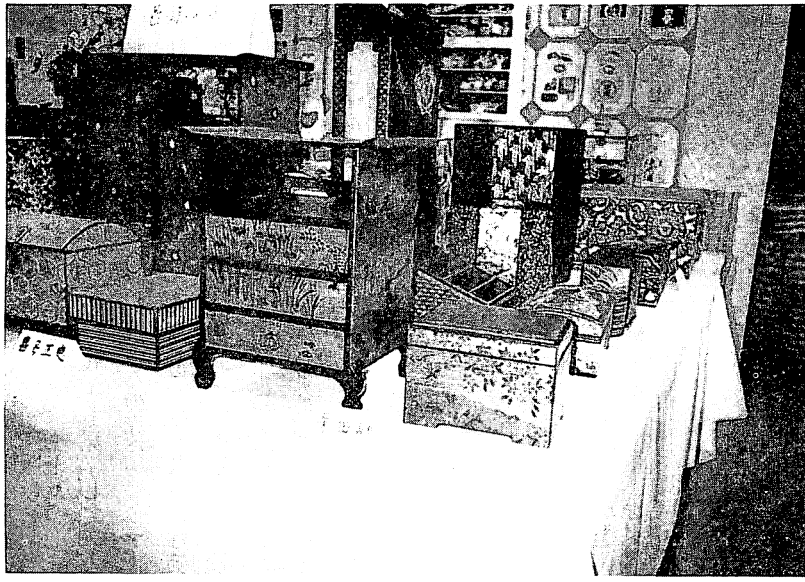
筥の作り方は、まず、ボール紙で作りたい筥のサイズに型紙を切って組み立てます。ボール紙は、いわゆるダンボール紙ではありませんので、今の所、先生から無償で提供していただいております。次に無地の和紙で下地を貼り、その上に好みの模様の和紙を飾り貼りして、ボンドを全体にムラなく塗って出来上がりです。キッチリと仕上がれば、とても紙で出来ているとは思えないくらい多種多様、風格のある作品に仕上がり、勿論、作者の

力量にもよりますが、踏み台にしてもビクともしないくらい丈夫なものになります。

わけても、先生の作品の美しさは、ただ驚嘆にあたいするばかりです。「一分一厘の狂いもなく」と表現されるものなのでしょう。これが、あの紙から作られたとは、ちょっと信じられません。日本の工芸の伝統をまざまざと見る思いがします。

しかし、それは目ざすべき目標であって、私達会員の作品は、それぞれの道程の中で、それぞれの位置を占めているだけ……。とまあ、つまり、各自の能力と意欲の領域の問題です。

昨年は、努力目標としましては、李朝箪笥がありました。多くの会員がチャレンジして、秋の文化祭にはその成果を発表することが出来ました。今年度は、筆箪笥が目標として、掲げられております。その他に会員は、それぞれ必要に応じて自分の作品を作ることが出来ます。雛の季節に金屏風を作ったり、端午の節句を前に飾り兜も製作しました。お針箪、整理箪、宝石箪!! パッチワークの切った布を入れておくハコ、編み物中の毛糸玉を入れておく箪、驚くべき事に、作者自身、使用目的が分か



らない、と言いつつ、高度な技術にチャレンジしている愉快な御仁も存在したりして……。

　筥作りの会に入れていただいて良かったことはいろいろあります。自分の必要と思う入れ物を、ピッタリのサイズで作れるうれしさ。これはまあ当然のことなのですが、まずは、カッターが正確に使えるようになったこと。次に、気軽にボンドで家の中のちょっとした修繕が出来るようになったことも副産物ではないかと思います。

　もしあなたが、筥の会に入られるとすると、一番初めは、ハガキ入れの小さい筥を作ります。これは大体、一日で完成します。その時、自分で選んだ美しい和紙を貼りつけて、てのひらに乗るくらいのその完成した筥を眺めた時、多分、ほとんどの人は病みつきになるのです。嬉しさに頬を紅潮させて、「次は……」と思わず、つぶやいている自分を発見されるでしょう。次は、あなたのお好みの作品を、いかようにもお手伝いします。材料はあの袋の中に、と。エエト、揃える道具は……。もう、あなたは筥作りのずっと以前からのお仲間です。もしかすると前からの会員よりずっと素晴らしい作品が出来るかも知れません。眠っている才能の開花があるかも。

筥の会の行事としましては、昨年は先生につれられて大阪まで和紙の買い出しに出かけました。梅田の第四ビルをひやかして、ついでにツインタワーも見学して来ました。お昼を食べてほぼ一日、おばさんの赤ゲットツアーとしゃれました。あとで写真をみると、みんなみんな笑みこぼれて実物よりも数等美人に写っていました。楽しい一日だったからでしょう。他に毎年忘年会をします。年齢的には上下ほぼ三十年の開きがあるのに、会員としては全く上下もなく、不思議なくらい楽しくやっています。先生や、会のリーダー、お世話役の方々のおかげです。

皆さん、どうかよろしく。

山歩き会

西幹　友雄

山歩きを始めてみませんか

一時期ほどのブームでありませんが、最近山歩きをする人が増えてきているようです。それも単独ではなく、

家族連れや若いグループ、中高年者といった人達がパーティーを組んで楽しそうに歩いている姿をよく見かけます。しかし、一見楽しそうに見える山歩きもおのずからまもらなければならないルールがあります。ルールをまもらなければ大事故につながるのです。

また当然のことですが山歩きは基本的には歩くことを前提、ピーク（山頂）を踏むことを目的としています。歩くことは健康に最もよいといわれています。家族で歩けば少しぐらいの距離は何でもありません。家族で行うハイキングは健康によいばかりではなく、家族の結束や子供達の精神的な成長にも大いに役立つといえます。たとえば耐えぬくという根性を育成し、がんばる気持をもたせます。都会に無い自然を観察して歩くことはわくわくする気持にさせます。ハイキングはこのような雰囲気から始まります。

近所の仲間、会社の同僚などと山登りやハイキングも楽しいものです。山と自然と共通した話題の仲間のなかで、気のおけない話をしながら歩く楽しさは、ほかでは味わえません。山を通じて語り合い、ともに山へ行くような友人を持ちたいものです。山仲間を作るには、山岳

会やまた平城N・T山歩き会に入会するのも一つの方法です。あなたも親しい山仲間といっしょに山へ向かって歩きだしてみましょう。

追伸（記録を残しておこう）山歩き、山登りでは出来るだけ記録を付けるようにしたいものです。記録を取るのは難しいことではありません。ポケットに小型ノートと一本のボールペンがあればよいのです。山名、日時、行動時間を記入し、場合によっては途中で見たものや聞いたこと、又費用を記録しておきます。山へいくごとに、何冊ものメモ帳が出来ます。それが、その人の登山記録となっていきます。

平城N・T（山歩き会）の今年度の予定は次の通り

五月　シャカ岳　　六月　後古光山
七月　白滝山　　八月　桟敷ガ岳
九月　金剛山　　十月　霊仙山
十一月　武奈ヶ岳　　十二月　愛宕山

以上を予定しております。

中国語講座

谷口三枝子

中国語講座を受講させていただく様になりましてから早いもので、一年四ヵ月経ちました。生涯学習という言葉を見聞きする様になってから久しく、現在では全国至る所で、老若男女を問わず生き生きと活動している光景をよく見かける様になりました。私も少しずつながら子供の成長とともに、私には当分無縁だと思われていた時間の余裕を持てるようになった頃に、折よく初級の講座を受講できる機会に恵まれました。全くの初心者で年齢的にも色々と不安がなかった訳では有りませんでしたが、いつの頃からか中国語は美しいリズムのある言葉だと感じておりましたし、同じアジアの隣国ということや、漢字圏ということであまり抵抗なく親しみを持ったことがきっかけでした。学ぶうちに美しいリズムのある言葉に感じたのは声調（四声）によるものだったようですが、聞くのと話すこととは大ちがいで後々この声調に悩まされるとは思いもしませんでしたが、それでも中国語を学ぶ事を通じての苦労やよろこびを共有出来る仲間がいる

ことが、何よりも大きな励みでもあり、又、支えともなっております。それにもまして久富木先生が根気よく、時には熱っぽく教えて下さる姿には感謝の気持でいっぱいです。週に一度黒板を前に、「ン」十年前の学生時代にもどった様ななつかしい緊張感を味わっています。いつの日か中国へ旅する日を夢みて遅々たる歩みながら前向きに歩んで行きたいと思っています。初級、中級クラスとも少人数でやっていますので気軽にお越しいただきます様お待ちしています。

俳句入門

私の俳句

込山　山歩

私と俳句の出合いは、中学の修学旅行で、提出した日記が手許に戻って来たときその終わりのところに、担任の教師が俳句を一句書いてくれていました。面白い文句だな、と思ったそれが俳句に接したはじめでした。その後たびたびの旅行日記にもいつも先生の一句が書き添えられていました。

社会に出てから、夏見舞、年賀状、と年二回の挨拶はご多分に漏れず、印刷ですませていましたが、せめて一言、付け加えたいと思い、ともかく、五、七、五の言葉を、印刷の横にペン書することとして、ン十年を過ごして来ました。平城ニュータウンに移って来て間もなく、文化協会ニュースにより「俳句入門」とあるのを知り、早速入会し、はじめて俳句の指導をうけることとなりました。

そのころ牧野先生は、大病癒え、退院されたばかりで、体調の整わないままにも、全くの素人の私にもくりかえし、くりかえし、懇切丁寧に指導してくださいましたので、はじめのうちは季語の一つもまともに使えなかった私も、ぼつぼつと言葉も覚えるようになり、毎月の句会に出す七句も、はじめはなかなか出来ず、苦しい毎月でしたが、次第に句も増えるようになり、その内に出句の中なら一句、また一句と読みあげられるようになりました。自分の句を読みあげられた時のうれしさは、たとえようもなく、それに励まされまた来月もと、句作りに力が入って来ます。しかしいつも調子よくゆくとは限りま

せん。自分ではうまく出来たと自信満々で出句しても、一句も読みあげられないときの情けない思い、われながら全くあわれなものです。入選した時と不調の時の落差は大きくて、帰宅した時、家人の目にもはっきり分かるようで、誠に他愛ないものです。

入選した句をふり反って見ますと、身辺にあった事柄が日記帳を見るように、順序よく綴られていていろいろな事が思い出されます。

薄氷ふやアイゼンの爪研ぎおかな

山ン小舎万年雪にラムネ冷え

若い頃歩き廻った山々が思い出されます。

甕墓の向きそれぞれに著莪の花

小春日や紅茶に染めし旗持ちて

九十九折れもみじの奥の木地の里

文化協会の野外講座に参加したこと、又歩く会について行ったこと等なつかしく思い起こします。

いしぶみの彫りの深さや蜥蜴の尾

拓本を打つ手止まりし雁の声

私のもう一つの楽しみとしている拓本に出かけるたびに一句、二句作るようにつとめています。

しかし楽しいことばかりではありません。今年の新春早々の大震災の恐ろしい思いはいまなお続いています。

寒む空に念佛申す瓦礫あと

若布干す余震の続く浜なれど

これからもいろいろな出合いがあると思います。その一つ一つを大切にして、そのことを句に遺したいと思っています。

毎月の例会には二十名余の会員の出席があり、先生からご指導いただいております。いつからでも入会出来ます、気楽に参加して下さい。会員一同お待ちしています。

牧野　春駒

講座の報告がマンネリに陥ることを避けるために、今回は込山山歩さんに前半を担当して頂きました。同氏は、数少ない男性の会員で、入会されてまだ七年余りですが、文中にありますように「俳句入門」だけでなく、拓本その他で活躍され、お仕事の面でも尚現役で大変なご多忙の中で、できるだけ多作をという私のアドバイスを守って、毎月見せて下さる作品の数は一番多いグループに入っています。その努力がみのって最近は際だって進境を見

せておられます。

毎年のことでした私の言い訳は、今回は少しすくなくて済みそうです。数年続いている胸や背の強痛は相変わらずですが、例会や吟行等で毎月ご一緒することができました。毎月発行している会報「ならやま」（A4版二～三枚）には、従来の会員作品の掲載の他、著名俳人にお願いした前号作品の選句、作句に参考になるような「～月のことば」を載せるようになりました。なお三年後に予定している合同句集「平城山三」予選句もつけ加えました。ご希望の方にはさしあげますので、幹事さんか牧野までお申し越し下さい。

文化協会の他のサークルも同様だと思いますが、残念なことは若い方の加入が少ないと言うことです。俳壇全体としては結構若い作家も増えているのですが。ともすればひとりひとりの「生」が見失われ、刹那的な快楽や、不自然な宗教に走ってしまう日常を、少しでも充実したものにするために〝体験入会〟でもされることをおすすめします。

園芸同好会

北村　孫衛

花作りへのお誘い

思い起こせば、焼跡闇市の名残りあるその昔、好きな土いじりの時も魚釣りの時も、いつも鼻唄で歌謡曲だった。曳山祭りの子供歌舞伎見物の帰りはいつも、バナナの大房を抱えて帰った少年時代。そして、時は流れて、還暦を越えた今も、少年時代からの楽しみが幾つもの輪になって続いていることが、嬉しく思われる。

最近はバイオの目覚ましい進歩により、花卉園芸の隆盛と、外国より輸入される種子と切花は、豊かな生活感覚の演出に、ほのぼのとした暖か味を醸し出しています。

また、土も植物の適性に合った用土の開発と共に、容器も、従来の植木鉢感覚を越えた素材やデザインで、その多様性を競っていて、花作りをやり出すと、ついついあれもこれも植えたくなります。

まあ、花の咲いているポット苗を植えればその日から水をやるだけでも数ヵ月は楽しむことが出来ます。だからと言って、花が終ったからと、姥捨山ならぬゴミ箱行きは、花が可哀相、また、来年へ繋げる何もない。

そこで、わが園芸同好会の良いところは、ホの字の花の種子を採る。球根は増やす。株分けはする。挿芽もする。可能な限り来年も、また花を咲かせたい。余分に出来た苗は分け合って、楽しみを共有して、ほのぼのとした気分を共有することにあります。

太陽のあるところ花があり、生涯現役の人生でありたい。

禅語に〝弄花香満衣〟とあります。また、花には仏が宿るとも、花は仏の姿を具現したものとも言われます。姿勢を低くすることは、心を穏かにすること、道行く人にも花は、無言の微笑を交わします。

自分の心のうるおいが他人にも伝わる。こんなにも素晴らしい花作りにチャレンジしませんか。……

パッチワーク研究会

山元　洋子

「パッチワーク研究会に入りたいのですが。」と、年に十回くらいは電話がかかって来ます。しかし、実際に新規に入会して下さる方は、二、三人のようです。パッチワーク研究会、などと仰々しい名前のせいかも知れません。電話だけしないで、一度のぞきに来て下さい。下手な説明よりもずっと楽しいかも知れません。このパッチワーク研究会の「研究会」と言うのは多分に便宜的なものです。同じ場所である有料のパッチワーク教室と区別する為にとってつけただけなのです。

毎月第二、第四金曜日に集まって、それぞれの作りたい物をパッチワークしています。その中で分からない所は先生に相談します。いつもは、それぞれ会員の好きなモチーフで作ったり、仲間の完成品を見て、急に欲しくなって真似て作り始めたりです。でも、不思議なもので、同じモチーフで同じような布を使って作っても、どうしても作者の個性がにじみ出るのです。しっとりと上品に仕上ったり、華やかにキラキラと輝いたり、支離滅裂に派手になったり。（これは私だけです。）

この一年間で、前年より少し変ったことは、先生の指導で、そろって同じものを二度作りました。一つは庚申さんのお猿さんで、もう一つは、最近あちこちの店でよく見かける布で作った熊のぬいぐるみを作ったことです。先生が型紙をコピーして、布もあらかじめ切って用意して下さったので少しおんぶに抱っこでした。これは皆さんに好評で、これからもちょくちょくこう云った企画があったら良いなァと会員の一人として考えています。

お針を持つ習慣のない方でしたら、小さな布をつぎ足して細々と縫いつないで行く事にうっとうしさをお感じになるでしょうか。それとも、ミシンのような文明の利器もある時代に何を今更、とお感じの方もあるでしょう。でも、自分で創ると云うことは、もしかすると人の根源の何かに深くかかわる本質的なものの一つではないかと考えます。自分で使う物を自分で作る、その為に吟味したり、時間をかけたり、とても贅沢な生き方かも知れません。作っているうちは、グチャグチャとして、色の合わせ方にも自信が持てないのですが、一つ一つと布をつぎ足し、つぎ足し縫い進んでいくと、知らないうちに、

自分らしさがにじみ出て、他の誰の作品でもない、自分の作品が現われて来るのです。

パッチワークの製作は場所をあまりとりませんし、こま切れの時間をつみ重ねて仕上げて行けます。今の私達のサークルは上手な人も初心者も混じっていて、それぞれのレベルでそのまま楽しくやっているのです。ご一緒に楽しみませんか。

英語講座

渡辺公美子

早いもので私が英語講座に参加させていただいて三年になります。その間皆勤賞とはほど遠く、あまり真面目な受講生ではありませんが、この誌面をお借りして講座のご紹介ができたらと思います。英語を新しく始めたい、又はこの講座に興味をお持ちの方々への参考になれば幸いです。

日時は第一・三土曜日（基本的に学校がある土曜日）初級が九時三十分から十時三十分、中級が十時三十分から十二時まで、平城東公民館にて行われています。初級のみ又は中級のみ受講の方、両方受講される方など、各々の都合で無理なく受講できるので、未就学児のいる私にはとてもありがたいところです。

教材はテキストをはじめ先生が用意されるプリントや英語のうたの聞きとり、ビデオなど英語の学習には必要と考えられるものはできるだけ使おうという先生のご配慮がうかがえます。

講座の雰囲気はとてもアットホームです。受講前に「英語オンリーでキビシイものだったら到底ついていけない」と危惧していましたが、皆さんに暖かく輪の中へ入れていただきなんとか今日まで続いています。その雰囲気は講師の鎌田先生の人柄に負うところが大きいと私は常々思っています。先生はアメリカで一年生活されたご経験をお持ちで、高校でも英語を教えておられます。「先生ではあるけれど、一緒に学びましょう。」という姿勢で講座の舵とりをして下さっています。

勉強以外にもちろん息抜きもあります。特に新年会のポトラックパーティー（各々の持ち寄りパーティー）は主婦の諸先輩に新しい料理のレシピを教えていただいたり、子育てのコツを伺ったりと私にとって楽しくありが

たいパーティーです。

語学を勉強していると、やはりネイティブと話してみたい、自分の話が通じるか確認したいと思う方は多いと思います。私も例外ではありませんが、学校を卒業して以来の長いブランクや、平城ニュータウンでの仲間づくりという点から文化協会の講座を勧められたことで思いきって参加することができました。これからも他の受講生の方々や先生から様々なことを貪欲に吸収できるよう細く長く参加していきたいと思います。

万葉集講座

大井　政子

今迄にも二・三、他の万葉講座に出席して、巻一の「籠もよ　み籠持ち　ふくしもよ……」から始まるのですが、何故か『東歌』に入る前に途中で中断する破目になってしまうのです。でも今度は、松岡先生が「来年からは『東歌』に入りますよ」と云われ、やっとたどり着いたと云う感じです。

勿論、万葉の勝れた歌人と云われる、人麻呂・赤人・旅人・家持等々の歌には、皆さんが良く御存知の、心に残る素晴らしい歌が沢山あります。

然し、一方では、東国の無名の農民達が、労働の合間に口ずさんだと思われる歌にも、自分を飾らない率直な気持が伝わり、古代人の素朴なおおらかさにも心がひかれます。

毎回、先生の手作りのテキストには、実にユニークな解説が入り、例えば、

筑波嶺に　雪かも降らる　否をかも　愛しき児ろが布乾さるかも　（巻十四・三三五一）

が、

筑波山はヨ　なんとヨ　白い事ダヨナ　雪が降ったのかヨ　イヤそうじゃなくてヨ　愛しいあの子がヨー布を干しているのかヨー

となるのです。思わず笑いがこみあげて来るではありませんか……。

もう記憶の彼方になった、文法の四段活用やら、「かかり結び」等と云う言葉に、昔の国語の授業を思い出します。時には「面白漢和辞典」の話になり、中国の象形

文字が、どのような経過で今の漢字になって行ったか等と云う説明もあり、あっと云う間に二時間が過ぎてしまいます。

阪神大震災の後の講座では日本列島活断層マップと、過去に起った、近畿地方の大地震の記録をコピーして来て下さったりと、盛り沢山なメニューを頂戴して帰ります。

こんな講座を聞いてみたいなと思われる方は、第一月曜日の午後一時半迄に北部出張所の会議室にいらして下さい。楽しみが一つ増えますよ！

……歩く会

広田　省吾

葛城の道 (一)

五月二十日

快晴の五月、近鉄御所駅からバスで風の森峠下車。間もなく風の森神社、正式には「志那都比古神社」に着く。田圃の中を縫うようにして高鴨神社へ。社務所の横には此の神社の宮司さんが栽培されている「桜草」の可愛いい鉢に皆さんの目がなごむ。更に山の方へと歩いていくと菩提寺がある。此のお寺は数軒の村の方がお守りしておられる。今日私達が拝観に来ると云うので当番の方がわざわざ本堂を開けて待ってて下さる。松岡先生、御推奨の、五つ目の如何なる邪悪な心を喝破される恐ろしい面体、それでいて慈愛が感じられる「法起菩薩」の頭部

右へ廻れば「蜘蛛窟」

「高天彦神社」にて

を拝観する。ここで暖かい日差の中で食事。その美味しかった事は言う迄もありません。

次いで胸つき八丁の登り坂、杉木立の中を登る。それでも途中の山野草の名前を知っている方がおられるのはさすがである。杉木立の中「蜘蛛窟」を経て葛城氏の祖神を祭っているといわれる「高天彦神社」に到着する。ものさびた神社の境内の巨木を仰ぎ奉納の絵馬を観る。鳥居の前を流れる小川の清らかな水を一口飲んで、「美味しい」と言う声がする。一〇〇％天然水ですよ。

村落を抜け野道を通ると〝史跡〟高天原の標識が立っている。高の原から高天原に来ましたよ。集落のはずれにある橋本院は、真言・修験関係の一坊。かつてこのあたりに多くの子院を持った高天寺の一坊が残ったものという。山の方から降りてきて、鐘楼門がユニークな極楽寺を拝観し、国道二十四号線のバス停へ。ややハードな山坂道もありましたが、参加者全員元気で帰途につかれました。

葛城の道 (二)　六月二十日　雨天中止

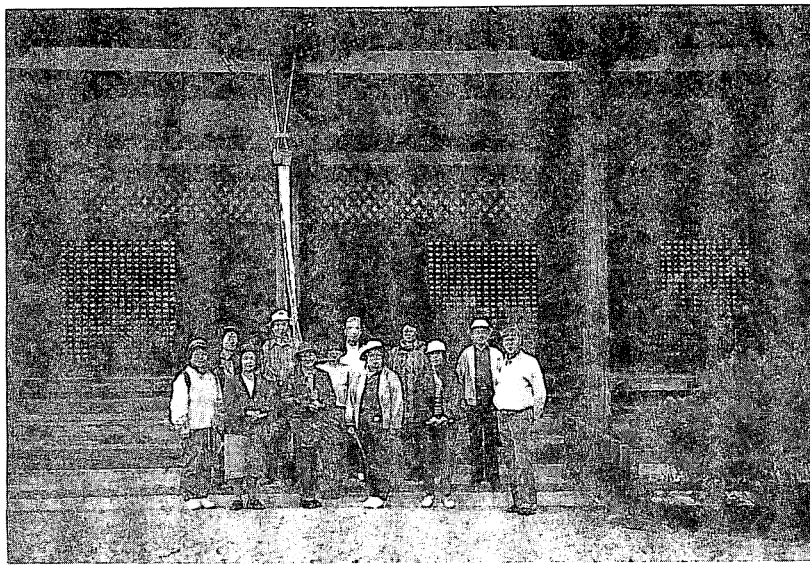
学研都市周辺散策　　九月二十五日

「けいはんなフェス'94」が、九月二十三日より約二ヵ月間開かれているので、近くにいながら「学研都市」が、どの様になっているのか知らなかったので、此の機会に「……歩く会」で行く事にしました。高の原バス停からバスに乗車し現地解散。当日は快晴でフェスティバルらしく花壇も華やかに整備され、皆さんはそれぞれ、私達が住んでいるすぐ隣、ハイテクを駆使された建物の周辺のそぞろ歩きを楽しまれた様です。

奈良町界隈　　十一月十三日

近鉄奈良駅から東向商店街を通り三条通りを東へ。猿沢池の西側、猿沢池に背を向ける采女神社を右に見て、勝南院町と書いて、「何て読むのやろ」「しょうなみちょうて読むの、ほんに町名は難しいわ。」わいわいがやがやと元興寺に到着。興福寺や東大寺と並ぶ勢力をもっていた此の寺院も、往時をしのばせるものは余りないが、瓦に不揃いがあり古い時代のものと云う。又庶民信仰の

「高 天 原」



「元興寺・極楽坊」にて

お寺として知られていたらしい。お寺の御好意で部屋をお借りし食事にする。

奈良町資料館では、南館長にお願いし、此の個人経営の資料館の生い立ちなどを聞く。薬師如来の頭部の香りを聞かせてもらう。此れはまさしく伽羅の香り。時価〇億円？　ウムム……。

〝庚申さん〟と親しまれて、軒先に吊るされた紅白の身替わり猿が並ぶ町を通り抜ける。

西光院では本堂に上り、弘法大師坐像を拝観する。此の辺りは、中将姫の伝説が多い。徳融寺では、中将姫と中将姫の父、藤原豊成の墓が残っている。中将姫が誕生したと言われる誕生寺では門が修理中であった。元遊郭であった街の一角を通り、高林寺へ。奈良町のはづれの高林寺は、藤原豊成の菩提所と言われているが、元は元興寺の一院であったらしい。年老いても、まだまだ美しい御住職にお寺の縁起話など皆さん神妙に聞いておられました。

奈良市が民家を買い取り、昔の奈良の商家を再現した「格子戸の家」を見学、御霊神社、元興寺塔跡と見て、奈良ホテル南側にある「旧大乗院庭園」見学を最後に奈

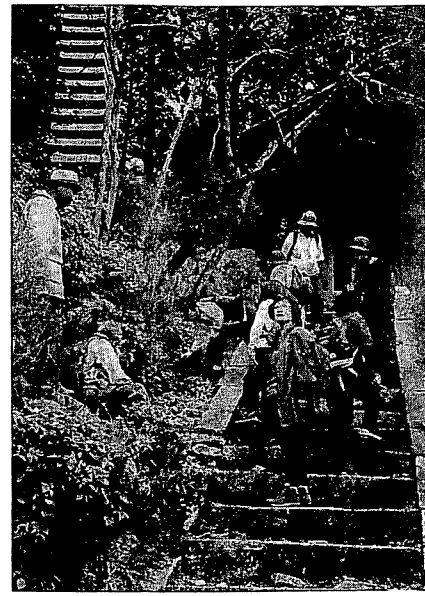
「弘仁寺」にて

良町探索は終りました。

山の辺の道・北コース　平成七年三月十七日

当日は、目を覚ますと曇で、中止かと思われたが、近鉄高の原駅では、準備をした人達が集まって来られたので、予定どおり電車で天理へ。

天理教本部の前を通り、東海自然歩道の標識がある山裾の細い道や、何の変哲のない野道を歩いているのに、「こんな野道を歩くのは久しぶり」と好評。名阪自動車道の下をくぐり工事中の白川池の見学台で食事。食事が終ってゆるやかな登り道を左へ、石段を登ると十三参りや、虚空蔵さんで知られる弘仁寺である。弘法大師の創建にまつわる神秘な伝説を伝える此の寺には、江戸時代の本殿の正面の軒の下に掛けられている絵馬の内、二枚は、いわゆる「和算」の計算方法を和算家が、平方根の求め方とか円周率など絵馬に書いて奉納した珍らしい遺品が残っている。鐘楼に上る石段の脇に柿の木があり、何とそれは、それは可愛らしい柿で「なすび柿と言うんや」と教えて下さる。奥之院では、お不動さまと日本一



柿の蔕探し

小さな稚児の滝を観て今回の「……歩く会」は終りに近づく。時間帯によっては、二時間に一本の割合で通行する高樋中町のバス停に予定通り着き、優しいメロディと共にやって来たバスに乗り近鉄奈良駅と帰路につきました。

〔付記〕

松岡先生より、「……歩く会」の窓口を引き継いで、早くも一年が経ちました。今更ながら自分の無知さに右往左往しております。窓口を引き継ぎながら、今迄通りお世話になっている松岡先生。下見に連れて行って下さった人々。（それにしても皆さん、本当に何もかも、よくご存知です。）そして何時も参加して下さる方々、ありがとうございました。

又、ここも面白いよと言うような所を、ご存知の方は、御連絡を御待ちしております。

短歌をたのしむ会

木庭　和子

昨夜、私は華麗な夢をみた。

場所は、宮殿〇〇間

時　は、正月〇〇日

折しも歌会はじめの儀が催されている。金屏風を背に、両陛下、左右の皇族席は、妃殿下方のローブがいろどり、居ならぶ歌会役員、選者の中に今年の召人、網干先生のお顔。そして選ばれてこの晴の席に列なる人々をみわたせば、全員『たのしむ会』の面々……。

ハッとした途端、その栄えある椅子から転げ落ちた所で、目が覚めた。惜しい！　せめてもう少しだけ続けてみせて欲しかったのに……。

文化協会発足より、一ヵ月遅れて開講した『短歌入門教室』が紆余曲折を経て『短歌をたのしむ会』と衣更えし、五十余回。片片の日常生活の中から拾い上げた感慨を、三十一文字にまとめることを楽しんでいます。と申しますと聞こえは良いのですが、月一回の例会の出詠歌がなかなか出来ず『くるしむ会』という声があがる時もあります。

「一日に十回、感動しなさい」――

いつだったか、こんな言葉を聞いてアッと思ったことがありました。平穏な日常にどっぷり浸り、何事も〝あたりまえ〟とばかり受け止めている自分の感覚に気付かされ、愕然としたものです。然し、平平凡凡の日日の中で「十回の感動」とは……子供のような好奇心と、みずみずしい少女のような感性を持ち続ける事と同じ位、むずかしいことだと思います。

でも感動は、作歌の原動力、これなくして歌を詠む気

力が湧かないし、言葉だけを並べたむなしい短歌は、読む人にも何の感動も与えないでしょう。喜びにつけ、悲しみにつけ、心を揺さ振るものを定型にまとめて表現するという、この簡単なようで面倒な作業を続けられるのも、うまく出来た（と自分では満足した）時の感動からではないでしょうか。

良い短歌が作れるように、ワクワク、ときめき、お互に刺激し合い、時には『くるしむ会』になろうとも、それはステップを一段登る苦しみと解しては如何でしょう。〝大法螺吹き〟と嗤われようとも〝夢〟は大きく、いさぎよく？です。

現在のところこの〝会〟では、先生御多忙のため、互選、互評のかたちで進行しています。ときには、それぞれの読んだ歌集や、評論のなかから共感の得られるもの等、参考として持ち寄ったりして、ワイワイ、ガヤガヤ文字どおり、自由な〝たのしむ会〟となっています。

お仲間に入って下さる方、大歓迎です。

読書会

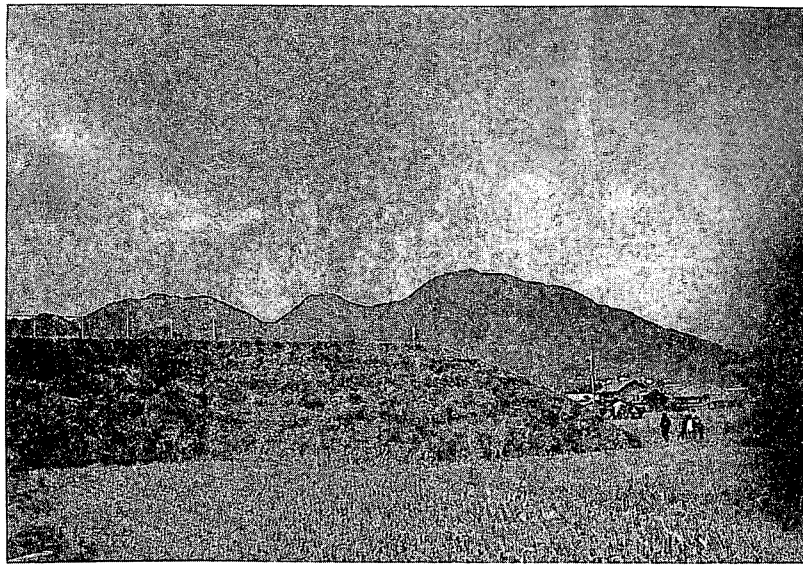
西島　芳子

読書会で、五木寛之著『風の王国』を取り上げたことについて、一寸した経緯（いきさつ）がある。それは平成五年、秋の大和路見学会で、香芝二上山博物館を訪れたときのことである。

引率の網干先生が、受付に置いてあった文庫本を指差され、「この本には僕の名前が載っているんや。」と言われた。その本の作者は、五木寛之、題名は『風の王国』で、私の知らない本であった。先生のことが書かれている！　それにこのような本が、何故この博物館に売られているのか、疑問に思ったことも私にその本を読ませるきっかけになった。

読み始めたら面白くて一気に読み進んだが、とうとう終りまで先生の名前が見当らない。おかしいな、と思いながらもう一頁めくったら、あとがき、とあってその文末に、

「……なお様々な御教示をいただいた網干善教氏、××××氏、○○氏、その他の方々にも感謝の意を



二上山

表す次第です。」

とあった。見事に先生にしてやられたと思ったが、ひょっとすると私の早とちりで、「この本の終りのほうに、僕の名前が載っている。」と言われたのかも――。洩れ聞いたところによると、先生が著者をあちこちと、案内されたとのことである。

何しろこの小説では、二上山、竹内街道、仁徳天皇陵などが重要な舞台となっており、至るところに近畿一円の、地名、神社、寺院、古墳、山、川、道、など文化協会の、大和路見学会、古代史現地見学、歩く会、或は、他の会の遺跡巡りで馴染み深い場所がでてくる。こんな細かいところまで、よく知っておられると感心した。

かつて、人目につかぬ山林や渓流の河原に、キャンプを張り、家族ぐるみで回帰性の移動・周遊の暮らしを行っていた、無戸籍の生活者たちがいた。彼らは農家の必需品であった、『箕』（主として穀物の殻やごみなどをふるいわける用具。広く浅く前が平らで三方に縁があり植物の蔓、皮、割竹、などを編んで作る。）の生産と修理を専業とし、自らを『世間師』または『ケンシ』と称して、千数百年にわたって独自の生活様式と、習俗をた

もち続けていた。

だが、一生無籍、一所不在、一畝不耕、の『箕作り』の生活様式は、時代とともに次第に困難を加えてゆき、明治ごろから官憲やジャーナリズムから、『山窩』という異様な俗称を押しつけられ、世間からながい間、誤解と偏見の目で見られるようになっていった。

女学生のころの私は、よく大人の眼を盗んで、その頃の雑誌の、キング、とか、講談倶楽部、などを読みあさったものである。そのなかで妙に記憶に残っているのが、三角寛の『山窩』を題材にした小説である。ストーリーは全然覚えがないが、変に猟奇的で挿画も薄気味悪かった。私は『山窩』とは半人半獣に近いもので、それは小説だけの話で、実在はしていないものと思っていた。

一体『山窩』という言葉はどこからきたのだろうか。作者は文中で『ケンシ』の血を引くある大学教授に、説明させているので、それを要約することにしよう。

『山窩』の『窩』とは、洞窟のことを意味する。中国では、強盗集団たちの多くが、岩山の洞窟に棲んだところから、『窩』という文字に、盗品をかくす所、また盗賊の巣窟＝盗賊集団という意味が派生した。それがわが国に伝わってきて、これに『山』をかぶせて一種の『山賊』の意味で用いたのが、松江藩の漢学を学んだ役人の一人であった。

『出雲国主不味公年代記略』には、「明和のはじめのころ、いづもはうきのくにざかひの山おくにさんくわすみ、さとさとにいでては、金穀をかすめさることしきりにて、たくはへありてくらなどをもついへいへをねらふ。そのすがた、けもののかはなんどをき、ふぢづるのあみがさをかうぶり、やまがたなさし、二十にん三十にんとたむろをなしておしこみきたり、ものおほくうばひさる。ふしぎなるは、まづしき家にはいらず、ひとをあやめぬことにして、云々（うんぬん）――」と記されている。

出雲では享保の大飢饉のあと、領内に賊が横行し、その多くは山中の洞窟にひそんで良民を苦しめた。その山中の盗賊に、『山窩』という造語をあてたのは、いかにも漢学の盛んだった松平家の役人らしい発想である。

ということである。『山窩』のルーツが出雲にあったとは、思いがけぬことだった。

だがこうして作られた『山窩』の呼称は、その後、明治、大正、昭和を通じて、国民の三大義務を拒否する無籍、放浪の人々の撲滅に、絶好の手段として利用され、警察側の資料提供による『犯罪実話集』『山窩奇談』のたぐいの本がつぎつぎと出版され、また当局とタイアップして雑誌にその種の猟奇小説が氾濫して、彼らの犯罪集団、異常生活者のイメージが強調されたのである。

然し、多くの移動・非定住民のなかで特に『ケンシ』が当局にマークされたのは、『米を食うと体が泥腐(どろくさ)る。』などと言い伝え、大和王権以来『常民』の根幹であった定住稲作農耕者と正反対の生きかたを、ひそかに保ちつづけてきた事が特に警戒されたのであろう。

明治十年、彼らにとって戦慄すべき事件がおこった。それには先ず、悪名高い『堺県令　斎所厚』に触れなければならない。この人物を評するのに作者は、昭和二年発行の文芸春秋に、四人の出席者による座談会の記事を載せている。その四人の顔触(かおぶれ)が凄い。それは――、

柳田国男、芥川龍之介、菊池寛、尾佐竹猛(おさたけたける)（法律家、大審院判事、検事、衆議院憲政史編纂委員長を務む）

柳　田　（前略）それから一番ひどいのは〇〇子爵ですね。

尾佐竹　堺の県令をしている時分に、奈良のたいていの社寺の古物などを持って帰るのですね。あれなんか県令の勢いで強奪したり、またはすり替えるのですからね。

芥　川　そういうのは裁判沙汰にならなかったのですか。

尾佐竹　明治初年の県令というものは、大名の後継者のつもりですばらしいものであり、司法権も警察権もまた一部の兵權ももっているというたいしたものでしたからね。……

柳　田　奈良の古物というものは、あの時分によほど多くなくなったといいますね。

尾佐竹　県令がご覧になるからといって取寄せて返さぬ。または、刀の中身などをすり替えて返す。それはまだいいとして属官が旅費をもらって出張して古墳を堂々と発掘して、その地方の豪家に命令して泊って、そして貴重品は県令様のポケットに納まるというのですからね。……（後略）

〇〇子爵とあるのは勿論、斎所厚、のことである。当時彼のやっていたことは、誰もが知っていたのに、それ

が生前あまり問題にならなかったのは、持ち去った文化財や美術品が、明治の高官や、元勲たちに献納されて、彼の手もとに私蔵されていなかったからだ。彼はのちに子爵をさずけられたあと、明治二十三年に帝室宝器主管となり、さらに正倉院御物整理掛として奈良の文化財を整理する役についた。将に、猫に鰹節、とはこういうことを言うのだろう。

堺県はすでに、河内・和泉を統轄していたが、明治九年、大和地方も合併された。当時の堺県令、斎所厚、は大県の威勢を示すため、『竹内街道』のあらたな大開鑿工事に着手した。『風の王国』の物語はこの工事が発端となって展開していくのである。

この街道は、古代から河内と大和をむすぶ官道として重要なルートであったが、たびたびの開鑿工事にもかかわらず、坂は険しく、霧が出れば迷い、雨が降れば崖が崩れるという悪路だった。

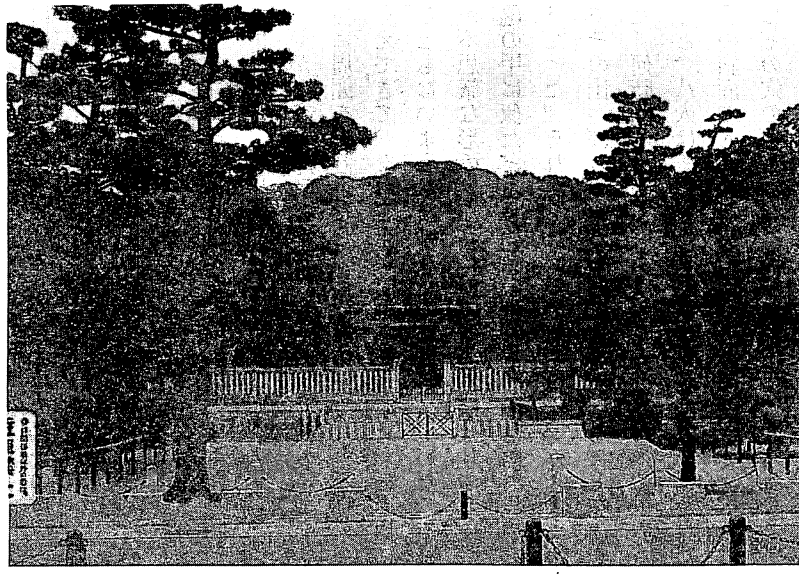
明治十年明治の難工事といわれた『竹内街道』の、大開鑿工事の現場の責任者は、県令の陰の懐刀として、人々に恐れられていた、縄岐要介という人物だった。

工事は難航し、しかも労務者のわずかな日当の上まえさえはねる縄岐のやり方に、怠業や逃亡者があいつぎ、ついに彼は囚人の使役をもはかったのだが、旨くゆかなかった。そこで考えついた最後の人員調達が、河内・和泉・大和一帯の非定住・無戸籍の浮浪者狩り、いわゆる彼らの名づけた『山窩狩り』だった。

動物のように、山河に狩られた無籍者たちは、二百四十数名の老若男女で、さまざまのグループがいた。『箕作り』系の『ケンシ』たちが約百四十名、その他極貧の行路病者、浮浪者、物乞い、売春婦、やくざ、逃亡中の犯罪者、旅芸人などで、その者たちは一まとめに、二上山の南の麓の日も当らぬ崖下の、家畜小屋のような荒れはてた三棟の納屋に収容された。

そのなかに、葛城山中にこもっていた聖のような若き山岳行者がいた。のちにその容貌と身軽さから『葛城の猿』と呼ばれるようになり、何時の間にか仲間たちの、リーダー格になって、皆に頼られる存在になっていた。

二上山での開鑿工事は難渋を極め、落石や土砂崩れで死亡事故があいつぎ、病人も次第に死んでゆき、土木作業に馴れない人々は次々に倒れ、二ヵ月の間におよそ七十人程人数が減っていた。



仁徳天皇陵（大仙古墳）

或るはげしい夕立ちと落雷のあった日の夜、縄岐要介の命令により、納屋のなかの八人の屈強な男達が選び出され、目的も告げられず何処ともなく連れてゆかれる。納屋頭が選んだ八人のなかに、『葛城の猿』は入っていなかったが、彼は自分から志願してその一人と代ったが、八人はぜんぶ『ケンシ』の仲間であった。

八人の男達は、縄岐要介の配下の男達に、その晩から歩き通しで歩かされ、着いた所は浜寺の海岸ぞいの廃屋だった。彼らは其処で珍しくたっぷりと食事を与えられ、蓆の上で眠ることを許された。強い風の音を聞きながら八人の男達は、言いしれぬ不安に圧しつけられ、それぞれ残してきた家族や仲間のことを思いうかべていた。

その晩の真夜中、縄岐要介の部下に連れてゆかれた所は、この場面では明記されていないが、彼らが今まで歩かされた道順や、着いた場所のたたずまいの描写などから察すると、『仁徳天皇陵（大仙古墳）』と思われる。彼らはその古墳の盗掘を強いられるのである。

暗く巨大な森を囲んでいる水濠を、用意されてあった小舟で二回渡り、盛り上がった大きな丘のとっかかりによじのぼり、凹凸のはげしい斜面を這い上がる。途中廻

廊のように平たくなった部分が二ヵ所程あり、それを縦に横切ってのぼってゆき、やがて丘の頂上の広場のような所に到着した。其処でまっていた縄岐要介の命ずるままに、八人は得体のしれぬ不安と恐怖に身震いしながら、用意してあったスキやクワを手に取り、指示された場所の土を注意深く掘り進んだ。何も考えずにただ言われるままに——。風が吹くたびに周囲の樹木がごおっと鳴る。

やがて、分厚い長方形の巨大な石の板につきあたり、更に周囲を掘り進むと、何原石のような丸石積みの壁が見えてきて、それを全員で掘り起こすと、その奥に見たこともないような奇妙なものが埋まっていた。それは何か不思議な形の、左右に何本もの出っぱりのついた大海亀の甲に似たどえらい石の塊りで、面も角も見事な仕上げだった。それから八人の男たちは、タガネとカナヅチでその出っぱりのある石面に穴をあけることを命じられた。何時間か経って、ようやく人の顔が入る位の穴があくと、八人はその場から遠ざけられ連れてゆかれたのは、丘の斜面で人間の背丈の倍くらいの深さで、広さは六畳ほどの穴の上だった。縄岐の部下に、穴へ降りて三尺掘れと命じられ、三尺掘ったあと更にもう二尺掘らされ、「休んでもよい」と言われ、全員がその場にへたりこんだとき、不意に頭上から斜面に積んであった葺石の山が、一気になだれ落ちてきた。石が跳ね、血が飛び、叫び声がおこるなか、上で男達の笑う声が聞こえてきた。

その次の深夜、二上山の麓の納屋へ、『葛城の猿』が倒れ込むようにして入ってきた。彼は深い土中で気を失っていたが、仲間が彼の体の上におおいかぶさってくれた為に、奇蹟的に意識を取りもどし隠し持っていた、あの浜寺の宿で仲間の一人から手渡された、双刃(もろば)の工刀(うめがい)で、土の壁に横穴を掘り、超人的な執念で地上に脱出したのだった。そして県庁の夜警をおどし縄岐の自宅をつきとめ、その寝所を襲い一刺しで彼を倒して、二上山へ戻ってきたのだった。

『葛城の猿』は納屋の全員に仲間八人の上に起こった出来事を話し、すぐ二上山を離れるべきだと主張した。はげしい議論の末、女、子供、老人も含めた八家族、全部で五十五人が二上山を離れて、彼と共に旅立つことに決った。その他のものは、二上山に居残ったほうが得策だと判断したのだった。

『葛城の猿』は、もと『バサラのヘンロウ』といって、

南伊豆の『ケンシ』だったが、この時から『葛城のヘンロウ』と名を変えて、南伊豆の山中にいる同胞を頼って八家族、五十五人と共に、関東への大疾走（おおのり）に出発した。

納屋を出て山腹にさしかかった時、彼らの目に入ったのは、燃えさかる納屋、桶からひしゃくで納屋に油をふりまいている縄岐の部下たち、逃げまどう女や老人を、こん棒を振りかざし片っ端から殴り倒している男たち、燃える納屋から飛び出したところを銃で撃たれる者、焔のふき出る納屋へ、子供を抱え髪を振り乱して飛び込んでゆく若い母親。これが納屋に残った仲間の『ケンシ』達の最後だった。

こうして、大人も子供も目前にしたことを、しっかりと瞼に焼きつけ、孫子の代まで語りつがんと、二上山を後にした八家族五十五人の旅が始まったのである。

八月中頃に出発した一行は、山に隠れ、尾根をたどり、各地の「ケンシ」仲間に助けられながら、秋には伊豆半島に達し天城を越え、ようやく南伊豆の山中にたどり着くことができた。

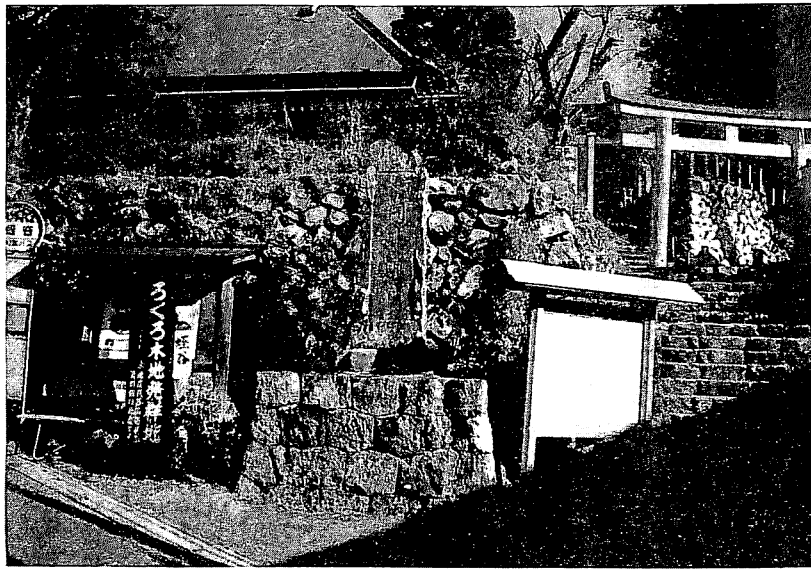
あの事件のときすでに百年後の浪民階級の終焉を、はっきりと末期の眼で見とおしていた、『葛城遍浪』のもとに、八家一族とその子孫が、『ケンシの心』を隠して一般市民社会にトケコみ、明治、大正、昭和の試練の時代を如何に生き抜いていったか——。またその後裔で、二上山の夜の山中を風のように歩くことの出来る『葛城哀』や、世界放浪の体験を持ち車が大好きの『葛城遍浪』の血を引く青年『速見卓』たちが、先祖から受け継いできた『ケンシの心』を、現代の管理社会にどのように生かしてゆこうとするのか——。

小説の本題は、このように二上山の納屋から脱出してきた『葛城遍浪』と『八家一族』のその後から始まるのだが、この小説をさあっと読んだ時、面白かった——。

可愛想やった——。で終りだったが、詳しく読返してみたところ、やや理解しにくいところもあったが、中々含蓄のある問題小説だと思った。

だが私が、この小説で取り上げたかったのは、のちに奈良県知事となった『斎所厚』のかかわる、仁徳天皇陵の盗掘と、『山窩』と呼称された『箕作り』の人々に関する記述部分であったので、小説の発端だけで残念だがこのあたりで終えるとしよう。

なお、仁徳天皇陵の盗掘場面で書き洩らしたが、八人



筒井八幡宮

の男達が掘らされた所から、やや離れた石柵で囲まれた所を見ながら、縄岐要介が「こっちには用がないぞ――。関白の猿めが蓋石まで運び出しおって……」と嘲るように独り言をつぶやいた。とある。仁徳天皇陵が盗掘を受けているということは、アメリカのボストン美術館に、仁徳天皇陵出土と伝えられる、獣帯鏡と鐶頭柄頭が所蔵されていることからも、周知のことであるが、豊臣秀吉まで盗掘していたとは驚きだった。尤も小説でのことだから事実かどうか分らないが、私は秀吉だったらやりそうなことだと思っている。

また作者は仁徳天皇陵の出土品が、ボストン美術館に所有されていることについて、縄岐要介――斎所厚――明治の元勲――ボストン美術館。という経緯を暗示しておられるが、これもその真偽のほどは神のみぞ知るである。

ところで話が変わるが、今は滋賀県神崎町永源寺町に属する、愛知川上流の奥深い谷筋を小椋谷といい、そこに蛭谷・君ヶ畑という二つの集落がある。昔からこの両

集落を『木地師発祥の地』という。

『木地師』とは、トチ、ブナ、ケヤキ、などの木を材料にして轆轤を使って、椀、盆、曲物、などの木工品を作る人達のことで、彼らは家族ぐるみ、数戸のグループを組み、北は東北から南は九州に至るまで良材を求めて深山に入り、共同作業を行い、原木がつきると他の山に移動するという漂泊の人々であった。

ところがこの地方の伝承によれば、平安時代の初め、第五十五代文徳天皇の第一皇子惟喬親王は、当然次の皇位を継がれる筈のところを、時の権力者藤原良房の血筋の第二皇子惟仁親王（後の清和天皇）に先を越されて、失意の身を小椋谷に隠棲された。

ある時、親王が法華経の巻物の紐を引くと、それにつれて軸も回転するという原理から、手引きの轆轤を発案され、親王自ら土地の人達に轆轤を使って椀や盆を作ることを教えられたので、惟喬親王を木地師の祖神として崇めるようになったという。

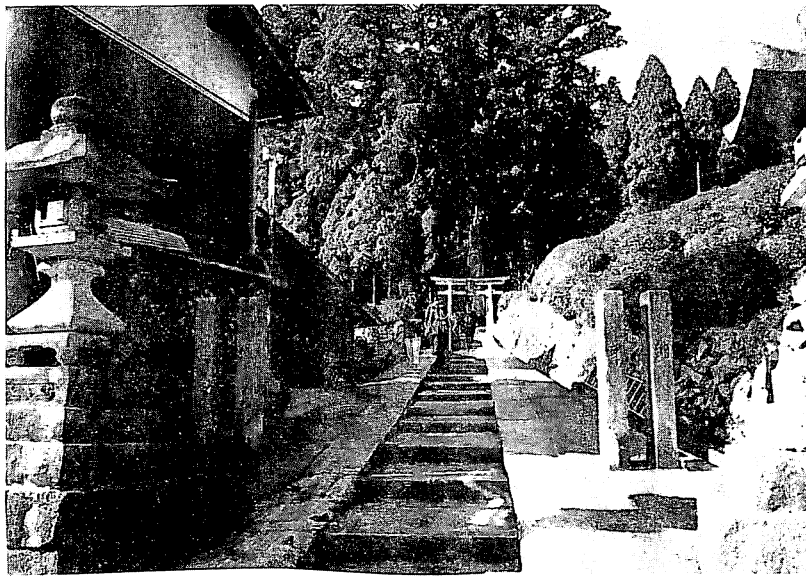
そこで、たまたま『風の王国』を読んだ読書会では、『箕作り』と『木地師』とは色々と相違点もあるが、ともにその職の材料を山に求め、移動生活を行うことでは共通していると思われるので、読書会の年中行事である文学散歩に『木地師の里』を見学することに決定した。

――それはもう秋も深まった十一月三十日、希望者が多くてあきらめて頂いた人もあった程で、とにかくバスは満席で永源寺町に向って高の原を出発した。

大橋先生の御配慮で、小学校の校長を務められ、現在は永源寺町の町史を編纂しておられる、加藤勇伍先生が案内役をして下さることになっていた。役場から乗車された先生は、御年頃は七十代後半位とお見受けしたが、御元気そうでその言葉の端々から、何よりも郷土を愛し、誇りとし、大切に思っていられることが感じられた。

永源寺から愛知川にそって、鈴鹿の山あいを十キロ程わけ入ること三十分程で、「宇治は茶どころ、茶は政所」と謳われたお茶の産地、政所の集落に着く。此処から更に北へ御池川の渓谷美を断崖下に眺め、四キロの山道をたどると蛭谷の集落である。

バスの停留場に、『ろくろ木地発祥地』と書いた標柱があった。すぐ横の石段を上ると、筒井八幡宮の社殿があり、境内に『木地屋資料館』が在る。この神社は貞観七年、惟喬親王が蛭谷の筒井峠に勧請された八幡宮で、



大皇器地祖神社

明治十五年以降に里宮として、この地に移られたとのことで、惟喬親王も御祭神として合祀されている。

『木地屋資料館』には手挽きの轆轤を始め、全国から寄せられた木地製品（東北で作られたこけしもあった）や、『氏子狩帳』とか『氏子駈帳』など、木地屋の動静を伝える貴重な記録も展示されていた。

蛭谷からいよいよ山道は狭くなり、バスの窓からひょっと覗いた谷底の深さにぞっとしたが、四キロ程走ったところで君ヶ畑の集落についた。君ヶ畑は永源寺町の一番奥まった秘境だというが、山あいの山がかぶさっているような薄暗い山道を、バスで揺られていたときには、一体どのような所へ行くのかと心細かったが、意外に開けていて明るかったので、一寸拍子抜けがした。

君ヶ畑には親王を祀る『大皇器地祖神社』と、親王の御住居と伝える『高松御所金龍寺』が隣接している。『大皇器地祖神社』には何とも知れぬ杉の大木が聳え、幽邃なたたずまいを増していた。私はすっかりこの神社が気に入った。人間惟喬親王よりも、この地方の地主神か山の神を祀るのにふさわしい御社であると思った。

次に向ったのは、筒井峠にある筒井千軒跡と筒井八幡

跡である。筒井千軒というのは、その昔筒井という集落があって、多くの木地師が居住して繁栄を極めたところで、蛭谷の筒井八幡も此処から移ったと伝えられる。附近一帯は森林となっており昼なお薄暗く、近年建立されたと思われる惟喬親王の御尊像や、御陵と称せられるものも存在していたが、その真偽の程は分らない。

『木地屋資料館』には民族学で重要視されている、蛭谷では『氏子駈帳』君ヶ畑では『氏子狩帳』と呼ばれている文書が公開されていた。

蛭谷の筒井八幡神社所蔵のものは三十二冊、記載の木地師戸主人数、延べ五万人、正保四年（一六四七年）より明治二十六年（一八九三年）までである。

君ヶ畑の金龍寺所蔵のものは五十三冊、記載の木地師戸主数、延べ一万人、元禄七年（一六九四年）より明治六年（一八七三年）までである。

蛭谷の現有で最も古いとされる、氏子駈一号帳は、正保四年であるが、当時庄屋であった大岩氏の日記によると、天正四年（一五七六年）四月十九日「今日より廻国し氏子駈を仕り始める」とあるので、正保の一号帳より七十年以上前から、氏子駈が行われていたことになる。

木地師は深い山中に棲み移動するので、彼らは里の村方人別には入らず、近江の小椋谷を本貫地としていたので、蛭谷の筒井公文所と君ヶ畑の金龍寺の両支配所から、木地師一人一人にその身元の証明や、宗門改めにも使用することができる印鑑（紙や木札で作られたもの）や、関所の通行手形なども発行されていた。

また木地師が他国で支障なく稼ぎが出来るように、偽書の御綸旨の写しや、偽政者から商売安堵の免許状を受け、これを御墨付きと称し、その写しも併せ持たせていた。

そこでこれら全国に散在する木地師を、五年から七年毎ぐらいに支配所から、僧、神主、村役人、庄屋などが巡回し、人別を改め冥加金を徴集した。この巡回のことを、蛭谷では『氏子駈』君ヶ畑では『氏子狩』と言った。

氏子駈（氏子狩）帳には、『訪問の年月日』『戸主名』『木地小屋の所在地名』『奉賀の種類と金額』などが記載されている。

木地師の人々はその身分を保証され、職業も公けに認められており、自分たちは惟喬親王を祖神と崇め、その随臣たちの末裔であると信じ、江戸時代には農工商の上にあるとの誇りを持ち、一般の村人とは通婚をしなかっ

たという。だが結局は、惟喬親王伝説に便乗した社寺や有力者たちによって、氏子という名のもとに支配され、搾取された、弱い立場ではなかったろうか。

それにしても、同じ移動生活者でありながら、戸籍を持つことを拒否し、国によって拘束されることもなく、自由に生きた代償のように、『山窩』という誤称を押しつけられ、仁徳天皇陵や二上山の麓で無残な死をとげた、あの『風の王国』のなかの『ケンシ』たちのことを、思い出さずにはおられなかった。

平成六年度
読書会　記録

四　月　鳥葬の国　夢枕　獏著
五　月　女性被害者　笹倉　明著
六　月　風の王国　五木寛之著
七　月　大江戸ゴミ戦争　杉本苑子著
八　月　休会
九　月　休会
十　月　やぶ医者の言い分　森田　功著
十一月　文学散歩　木地師の里を訪う

以下、年度末まで休会

十一月三十日　文学散歩行程

高の原出発役場 ― 永源寺町 ― 永源寺 ― 昼食 ―
永源寺ダム（堰堤で観望） ― 蛭谷 ―（筒井八幡宮／木地屋資料館／帰雲庵） ― 君ヶ畑
（大皇器地祖神社／高松御所金竜寺） ― 筒井峠 ―（筒井八幡跡／筒井千軒跡） ―
百済寺 ― 八日市 ― 高の原着

同好会紹介

《写真同好会　赤坐　右一》

写真同好会の世話をしないかとお話しを戴き、安請合いをしたものの、これは大変な事になった……、後の祭りでビギナーもプロも一緒に理屈抜きで、同好の友がワイワイガヤガヤとやりながら、月に二回位、平日と土曜日に各一回、近くに撮りに歩いたり、楽しく一日を過ごせたら良いなあーと思っています。

皆さんのご参加をお待ちしています。

《手踊り同好会　毛利　公子》

長寿社会の中、女性の地位向上に伴い余暇を楽しむ人達が、ふえてまいりました。数多い趣味の中でも、日本舞踊は、時間的にも経済的にもいろいろ難問があります。

七年前、どのような方でも手軽に楽しめる踊りとして手踊りを創作していらっしゃる、山中遊小夜師匠と、御縁があって、お稽古を始めました。現在、足の不自由な方でも好きな歌に合わせて楽しんでいらっしゃいます。マイク片手に、歌い乍ら踊ることもできます。

山中師匠が振り付なさっている「なら祭りちょいちょい踊り」には毎年参加しています。

三月には護国神社の椿祭りで奉納の踊りを、五月には奈良市の国際交流協会より、メキシコに行って、オアハカの州立大学の講堂で踊らせていただきました。本当に踊りを習っていて良かったと、感謝している毎日です。

何年か前、文化協会の発表会に、手踊り、カラオケ手踊り等、出演させていただきました。昨年秋より、講座の仲間に入れていただいて、月二回楽しみ乍ら、お稽古しています。踊りは、健康の為にも、老化防止の為にも良いと思います。踊りによって自己表現なさりたい方、踊りに興味のある方、是非ご一緒に楽しみませんか。

第十二回　文化祭記録

展示の部

前期　十月三十日～十一月三日

◆書道
高篠　陽子　田室　利雄

◆絵画
梶野　哲　青木　光子
岡本　幸子　柏原　愛子
込山　嘉代　沢田　昌江
島川　正行　白松　春子
南村　勝次　服部　純世
堀池　光合　村岡ちい子

◆押絵
谷口　直子　青山　浜子

◆木目込人形
石森千代子　井藤ちづみ
斉藤多美子　島田　守恵
辻田美智代　西岡　智子
東山　幹子　桝井　恵子
安田　清子　吉井史恵子
打田　照子　櫟原千鶴子
周藤　智子　砂本　敏子
林　美智子　林　博子

田室美智子
石崎　路子
小西　淑彦
沢田　実子
出口真喜子
広田　省吾
吉澤　幸江
網干佐和子
木村　長子
菅原　静子
西本万優美
陣内　満子
鷲塚　順子
岡田　越子
野川タカ子
三輪　久恵

◆パッチワーク

山内　梅乃

◆デコパージュ
杉山　啓子

◆園芸
北村　孫衛　杉山　啓子

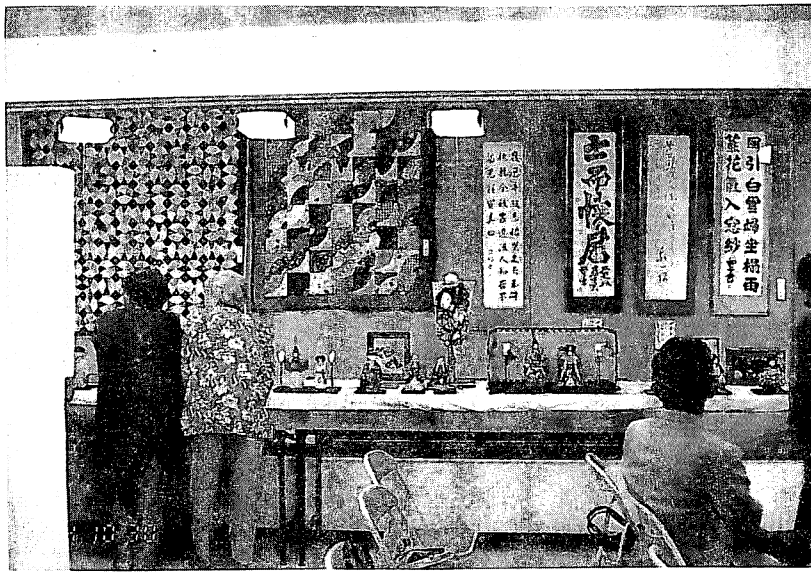
◆木彫
井ノ山一雄

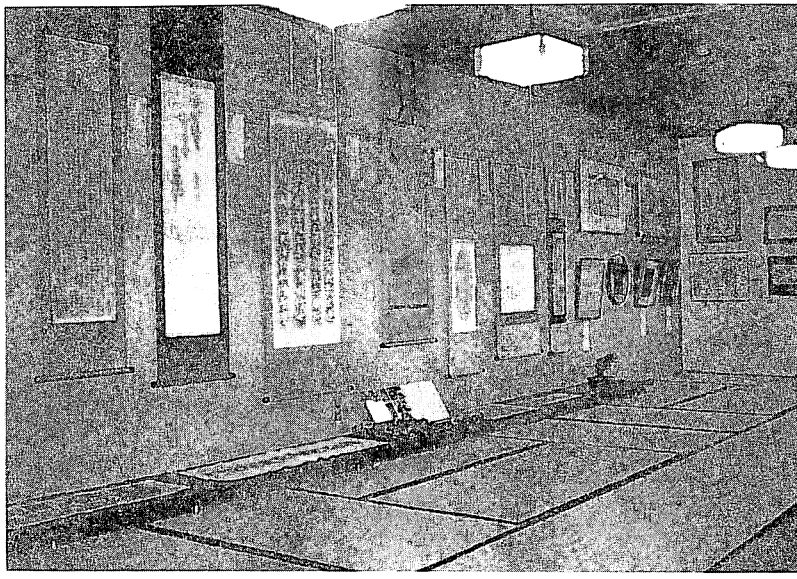
後期
十一月四日～八日

◆拓本
込山　博介　岩井　静栄　宇野木久代
北本　敏子　喜多　正恵　黒田　節子
黒田　忠勝　沢田　実子　白松　春子
鈴木　玲子　宗徳　郁雄　高橋　友示
高橋はる江　竹本　千鶴　南村　勝次
南村　照栄　中村　弓子　西尾　弘子
西島　芳子　西山佐代子　広田　省吾
藤原　香　堀池　敏子　堀池　光合
山田　正子　渡辺　亮斗

◆短歌
網干　善教　大浦小枝子　岡田　越子
久門　富美　木庭　和子　沢田　実子
玉置　小代　藤原　香　松尾　すみ
松村せつ子　山崎たみ子　棉源　瑛子

◆俳句
牧野　春駒　伊藤　柳紅　上原　高美





大浦小枝子　岡　良子　柏木　一枝
川口シズヱ　喜多　まさ　木村　長子
込山　博介　坂本よしゑ　辻田しま代
中川　君子　南村　照栄　西岡　智子
西田たまみ　西山佐代子　福井　とみ
藤沢　陽子　堀池　敏子　牧野　和代
三井サチ子　森田　陽子　和田美代子
赤坐　右一　竹田　洋祐　牧野　春駒
増田　亮

◆写　真

◆ちぎり絵

柴田八重子　大谷　桑子　柏木　一枝
喜多　まさ　喜多　正恵　周藤　智子
瀬島　啓子　辻田しま代　西山佐代子
山内　梅乃

◆筥作りの会

中野　昭三　櫟原千鶴子　奥村　淳子
喜多　正恵　北村　源子　柴田　静枝
杉山　啓子　高橋　笑子　山内　梅乃
山元　洋子

◆地酒の会　日本酒ラベル　写真

◆園　芸　北村　孫衛　杉山　啓子

上演の部

◆大正琴　琴倖会有志

曲目「ふる里」、「酒は涙かため息か」「黒田節」

◆詩吟　詩吟の会

ナレーター　木村　長子

コンダクター　吉本　音市

「九月十五夜」菅原　道眞

中井　義昭　白松　春子　津崎美津子

上田　佳子　海野　ミツ　加納　香苗

星野　朝子　山崎　明　春田　良子

西岡　智子　諏訪喜代子　越智　信子

中山　綾子　細川　昭子　土井　正子

吉田　照子

「百虎隊」佐原　盛純　林　直一

「白帝城」李　白

陣内　満子　中川　君子　吉井史恵子

「弘道館賞梅花」徳川　景山　花田　克子

「江南春望」杜　牧　中西　迪子

「太田道灌」　藤澤　陽子　　西尾　弘子
「花朝澱江下」扇舞　大村富士江　吟　　大迫くき枝

◆舞　踊

「佐渡の恋唄」　　久門　冨美
「京の四季」　　岡田　利一
「むらさき雨情」　　新田　慶子
「夕暮れ」　　毛利　公子

◆混声コーラス

ふれあいコーラス「グリーンブライト」
指揮　安藤　幹彦　伴奏　緒方　美世
「雪山賛歌」　　男・女
「モルダウの流れ」　　二十五名
「今日の日はさようなら」

◆舞　踊

「祝賀の舞」　　久門　冨美
「祝い船」　　岡田　利一
「みだれ髪」　手踊り同好会　　毛利　公子

◆クラシックギター　独奏　　中村　昭三

「ショーロス第一番」
「中南米組曲」より

「月　光」　全員　合唱
「アルファンブラの想い出」　出野　はる
「禁じられた遊び」　笠島タミ子

◆民　謡

「真室川音頭」　和田　保子
「関の五本松」　新藤　清
「生保内節（オボナイ）」　吉田　篤史
「伊勢音頭」　全員　合唱
「淡海節」
「白頭山節」
「幸せのワルツ」

◆箏　曲　菊池雅千絵教室

「星のように」　河本雅楽州（うたしま）　吉本　康子
第一箏　本多美智子　比良　尚美
第二箏　菊池雅千絵
十七弦

「祭花二番」
第一箏　本多美智子　比良　尚美
第二箏　河本雅楽州　吉本　康子
十七弦　菊池雅千絵

1995年度（平成7年度）

平城ニュータウン文化協会総会

日　時　1995年4月29日〔土（祝）〕
PM1：30 ～ 2：15

場　所　奈良市北部出張所会議室

Ⅰ　開会の辞

Ⅱ　会長挨拶

Ⅲ　来賓祝辞

Ⅳ　議長選出

Ⅴ　議　事

(1) 1994年度事業報告の件
(2) 1994年度決算・監査報告承認の件
(3) 1995年度事業計画（案）承認の件
(4) 1995年度予算（案）承認の件
(5) 新役員選出の件
(6) その他

Ⅵ　閉会の辞

第13回総会記念講演

『大化改新1350年におもう』

講師　関西大学教授

網　干　善　教

1994年度　事　業　報　告

1994年４月17日　役員会・常任理事会開催
23日　神功・右京地区主催の歓送迎会出席
５月15日　協会報発行　全戸配布
22日　第12回（'94年度）総会
記念講演「インドマヘート遺跡発掘」　網干　善教先生
６月５日　春の大和路見学
「スジカイの道」（太子道）～黒田古墳へ……
現地説明　網干　善教先生
７月１日　ニュース１号発行
14日　デコパージュ１日講習
26日　奈良市役所市民課へ陳情（会議室の件）
８月25日　常任理事会
９月５日　ニュース２号発行
18日　地区コミュニティー会館管理運営委員会出席
21日　観月の会
10月２日　右京小学校運動会出席
３日　協会誌「層富」第11号発行
９日　地区コミュニティー会館管理運営委員会出席
15日　協会報発行　全戸配布
16日　右京自治連合会主催「ふれあい祭り」実行委員会出席
30日　右京自治連合会主催「ふれあい祭り」お茶席協力
10月30日～11月８日まで　文化祭開催
30日　記念講演
「まほろば」── 大和の国は ──　網干　善教先生
30～11／３日　前期展示の部
書、絵画、手芸、押し絵、木目込み人形、パッチワーク、園芸、デコパージュ
11／４～８日　後期展示の部
拓本、短歌、俳句、写真、園芸、筥作りの会、地酒の会、ちぎり絵
11／３日　上演の部
詩吟、大正琴、舞踊、箏曲、混声コーラス、ギター独奏、民謡
３日　お茶席開催
11／６日　囲碁大会
11／８日　ごくろうさん会
11月10日　ニュース３号発行
20日　秋の大和路見学「二上山東麓を歩く」　網干　善教先生
26日　「ちぎり絵」特別講習（干支）　柴田　八重子先生
12月10日　他市コミュニティーセンター見学（右京自治連合会主催）
23日　「新春を祝う会」の打ち合わせ会議
1995年１月１日　ニュース４号発行
８日　第12回「NT新春を祝う会」参加
２月28日　奈良市「高の原コミュニティースポーツ会館」開会式出席
３月１日　ニュース５号発行
26日　役員会、理事会・常任理事会開催

1994年度　決　算　報　告

【収入の部】

（単位：円）

項　　目	予　　算	実　　績	増　　減	備　　考
前年度繰越金	356,988	356,988	0	
会　　費	510,000	585,500	75,500	@ 1,500×390＋500
後　援　費	90,000	90,000	0	各自治連合会より
寄　付　金	10,000	20,000	10,000	講師先生より
雑　収　入	33,012	43,358	10,346	銀行利息、懇親会余剰金、茶券収益金
合　　計	1,000,000	1,095,846	95,846	

【支出の部】

（単位：円）

項　　目	予　　算	実　　績	増　　減	備　　考
事　業　費	100,000	33,298	66,702	文化祭、セミナー
助　成　金	63,000	63,000	0	講座、同好会
会　議　費	20,000	18,225	1,775	会議、資料、他
広　報　費	500,000	386,567	113,433	会誌、会報、ニュース
事　務　費	20,000	17,391	2,609	事務用品、他
印刷、消耗費	80,000	94,945	△14,945	コピー機修理代
通　信　費	15,000	3,140	11,860	郵便料
渉　外　費	25,000	4,000	21,000	協賛費、祝金等
雑　　費	50,000	20,770	29,230	
予　備　費	27,000	0	27,000	
積　立　金	100,000	100,000	0	コピー機買い替え
小　　計	1,000,000	741,336	258,664	
次期繰越金		354,510		
合　　計	1,000,000	1,095,846	258,664	積立貯金　100,686

合　計　監　査　報　告

1994年度会計につき帳簿・証票など監査した結果適正であることを認めます。

1995年3月31日　監　事　大　浦　小枝子　㊞

監　事　渡　邊　　亮　㊞

1995年度　事　業　計　画

――はじめに――

当「協会」は、地域での日常的な文化活動を通して、地域コミニティー・住民の親睦と和を実現していくために、当時の自治会・連合会の「街づくり」の方針のなかで結成推進されてきたものです。

この設立趣旨にそって、地域住民の多くの方の、参画を期するとともに、会員の研究、創作発表、相互の交流等の場としつつ、地域文化の発展に、寄与することを基本としていきます。

また地域四自治連合会をはじめ、スポーツ協会、教育懇談会、地区社会福祉協議会などの各団体の活動とも連携して、ひきつづき「街づくり」に貢献していきます。

――おもな計画――

1．講演会の開催

　　総会記念講演　文化祭記念講演

2．セミナーの開催

3．会誌『層富』の発行

4．会報の発行（全戸配布）

　　文化協会案内号　文化祭案内号

5．ニュースの発行　　奇数月発行予定

6．大和路見学会　春1回　6月25日にあすかの遺跡周辺（大化改新の舞台）

　　秋1回

7．文化祭の開催

8．観月の夕べの開催

9．年間を通じて趣味の講座開催

10．平城ニュータウン新春を祝う会

11．その他

会の発展を期しての工夫など会員各位の、提案、役員会決定などにもとづき適宜事業を推進したい。

1995年度　予　　算

【収入の部】

項　　目	金　額	備　　考
前年度繰越金	354,510	
会　　費	525,000	@1500×350
後　援　費	100,000	各自治連合会より
寄　付　金	10,000	
雑　収　入	28,490	銀行利息他
積　立　金	100,000	
合　　計	1,118,000	

【支出の部】

項　　目	金　額	備　　考
事　業　費	100,000	文化祭、セミナー他
助　成　金	66,000	講座、同好会への助成
会　議　費	20,000	会議、資料、他
広　報　費	500,000	会誌、会報、ニュース他
事　務　費	30,000	事務用品
印刷、消耗品費	150,000	印刷機器消耗品、コピー
通　信　費	18,000	郵送料、電話代
渉　外　費	30,000	協賛費等
雑　　費	50,000	各項目に該当しない必要経費
予　備　費	54,000	
積　立　費	100,000	印刷機器買い替え費（別会計）
合　　計	1,118,000	

平城ニュータウン文化協会講座・同好会一覧

電話局番＝（７１）

	番号	講座・同好会	担当者	電話	曜日・時間	予定会場
定期	1	歴史教養講座	網干善教	6510	第２火曜（10時～12時）	北部出張所会議室
	2	古代史講座	鬼頭清明	2997	概ね第４火曜（14時～16時） 問合わせ　西島（07747－3－2986）	〃
	3	囲碁同好会	中村正雄	0106	毎日曜日（13時～18時）	平城西公民館和室
	4	木目込人形・押絵同好会	（窓口）東山幹子	3635	第１・３水曜（10時～14時） 指導・谷口直子	北部出張所会議室
	5	読書会	大橋一二	4501	第４日曜（10時～12時）	〃
	6	中国語講座	久富木幸子	5015	毎週水曜（９時半～11時） 問合わせ窓口は坂陽子（71－3468）	〃
	7	詩吟の会	大迫くき枝	2533	第１・２・３水曜（13時～15時）	〃
	8	地酒を味わう会	中村正雄	0106	第２土曜（18時半～）	会場不定
	9	園芸の会	北村孫衛	0823	第４月曜（13時～16時）	自宅（右京４丁目７－５）
	10	拓本を楽しむ会	込山博介	5058	毎月１回（日時・場所はその都度事前に会員に通報）	北部出張所会議室
	11	絵画の会	梶野哲	3295	第１・３・４・５火曜（10時～12時） 第２火曜（14時～17時）	〃
	12	俳句入門（平城山句会）	牧野春駒	1777	第３木曜（13時半～16時） 問合わせ　西山（71－4950）	平城西公民館和室
	13	短歌を楽しむ会（平城山句会）	網干善教	6510	第３火曜（13時半～16時） 問合わせ　木庭（71－3494）	北部出張所会議室
	14	フランス語講座	高橋節子	8253	毎月曜（10時～11時半）	〃
	15	山歩きの会	西幹友雄	6102	第２日曜（雨天中止の場合は第３日曜）	野外
	16	英語講座	鎌田時栄（ハルエ）	3150	第１・第３土曜（９時半～正午）	平城東公民館
	17	万葉講座	松岡禮一	2964	第１月曜（13時半～15時半） 第１水曜（19時半～21時）	北部出張所会議室
	18	…歩く会	（窓口）広田省吾	0207	奇数月第３金曜日、偶数月第３日曜日	野外
	19	宮（はこ）作りの会	中野昭三	3258	第２・第４月曜（10時～16時）	北部出張所会議室
	20	野草をしらべる会	前川良雄	0682	春・夏・秋年に３回程度	野外
	21	パッチワーク研究会	（窓口）山元洋子	5138	第２・第４金曜（１時～） リーダー　打田	北部出張所会議室
	22	手踊り同好会	毛利公子	1989	第１・第３水曜（14時～16時）	右京集会所
	23	写真同好会	赤坐右一	0111	現在調整中、希望者はお電話を	会場不定
不定期	24	源氏物語研究	☆浅田知里	1258	希望者は電話で申し込んで下さい	北部出張所会議室
	25	星を見る会	☆此下享	3377	開催時、ポスター等で広報	北部出張所会議室前
	26	アマチュア無線の会	☆浅田旭彦	1258	希望者は電話で申し込んで下さい	〃
	26	「子どもの生活」研究会	加藤育生 北村雅子	5223 0753	希望者は電話で申し込んで下さい	〃

会　則

第一章　総　則

第一条　この協会は、平城ニュータウン文化協会という。

第二条　事務局は、平城西公民館に置く。

第二章　目的及び事業

第三条　会員の研究・創作発表、知識の交換並びに会員相互間及び他の文化団体との連絡提携の場となり、総合文化に関する進歩普及をはかり、地域文化の発展に寄与することを目的とする。

第四条　前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1　講演会・研修会・展覧会・発表会・文化講座等の開催。

2　関連文化団体との連携及び協力。

3　研究の奨励及び研究業績の表彰。

4　会誌の発行。

5　その他目的を達成するために必要な事業。

第三章　会　員

第五条　平城ニュータウンに在住又は勤務する者で、協会の目的に賛同する者とする。会員の種別は次のとおりとする。

1　正会員　年間会費　一、五〇〇円
　　但し、高校生　五〇〇円

2　賛助会員　この協会の趣旨に賛同する者で、年間会費　五、〇〇〇円以上納める個人又は団体とする。

第四章　役　員

第六条　協会には次の役員を置く。
会長一名、副会長三名、常任理事若干名、事務局長一名、事務局次長一名、会計一名、理事若干名、監事二名。

第七条　理事は、正会員中より選出する。
二、会長、副会長、常任理事は理事の互選で定め、総会の承認を得る。

三、事務局長、事務局次長、会計は理事中より会長がこれを選任し、総会の承認を得る。

四、監事は会員中より二名選出する。

第八条　会長は協会を代表する。

二、副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは代行する。

三、理事は理事会を組織し、協会に関する事項を審議し執行する。

四、常任理事は理事会の決定に基づき業務遂行に当るとともに、総会で決議した事項を執行する。

五、事務局長は会務の遂行に関する理事会、常任理事会等の決議に基づき全般の事務連絡処理に当る。

六、事務局次長は事務局長を補佐する。

七、会計は会計事務を処理する。

八、監事は会計帳簿を監査し、通常総会において報告する。

第九条　顧問・参与を置くことができる。顧問・参与は理事会の同意を得て会長が委嘱する。

二、顧問・参与は会議に出席して意見を述べることができる。

第十条　役員の任期は二年とし、再任を妨げない。

二、補欠により選出された役員の任期は、前任者の残任期間とする。

三、役員はその任期満了後でも、後任者が就任するまで、なおその職務を行う。

第五章　会　議

第十一条　理事会は必要に応じ会長が招集する。但し、理事の三分の一以上から会議の目的を示して請求のあったときは、理事会を招集しなければならない。

二、理事会の議長は、会長又は会長の指名する者とする。

三、理事会は、理事の二分の一以上出席しなければ議事を開き議決することができない。

四、理事会の議事は、出席理事の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決する。

第十二条　常任理事会は、会長、副会長、常任理事、事務局長、会計によって構成し、必要に応じ会長が招集する。以下理事会に準ずる。

第十三条　通常総会は、毎年一回会長が招集する。

二、臨時総会は、理事会が必要と認めたとき会長が招集する。

三、総会の議長は、総会出席者の中から指名する。

四、総会の議事は出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決する。

第十四条　次の事項は通常総会に提出して、その承認を受けなければならない。

1　事業報告及び収支決算

2　会計監査報告

3　事業計画及び収支予算

4　その他理事会において必要と認めた事項

第六章　会　計

第十五条　経費は会費並びに補助金、寄付金、その他の収入による。

第十六条　会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る。

第七章　会則の変更

第十七条　この会則は、総会の議決を経なければ変更することができない。

第八章　補　則

第十八条　この会則施行についての細則は、理事会の議決を経て別に定める。

第十九条　この会則は、昭和五十八年二月二十七日から適用する。

一九九五年度 役員名簿

会長　網干善教
副会長　橙　修造
　　牧野自然
　　松岡禮一
事務局長　山内梅乃
次長　此下　享
会計　西村美佐子
監事　大浦小枝子
　　渡邊亮斗
参与　大橋一二
　　川口　勇
　　谷口直子
　　永田喜一郎
常任理事　上中敏央
　　大迫くき枝
　　岡田越子
　　梶野　哲
　　鎌田時栄
　　北村孫衛
　　鬼頭清明
　　木庭和子
　　木村長子
　　久富木幸子
　　辻山博介
　　杉山啓子
　　鈴木幸子
　　高橋節子
　　田中幸夫
　　玉置小代
　　中野昭三
　　中村正雄
　　西島芳子
　　西幹友雄
　　西山佐代子
　　東　叡
　　廣田省吾
　　廣田好実
　　前川良雄
　　毛利公子

理事
　　山元洋子
　　吉田篤史
　　飯田雅子
　　大井政子
　　大工美智子
　　河村美智子
　　喜多正恵
　　北川尚子
　　楠見龍太郎
　　澤田實子
　　篠田千恵子
　　柴田晃良
　　中田光子
　　南村勝次
　　新見和美
　　西岡智子
　　濱口光良
　　水野康枝
　　山下良吉
　　吉村惣五郎